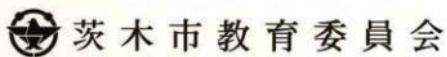


大 阪 府 茨 木 市

## 平成13年度発掘調査概報

平 成 1 4 年 3 月





総持寺北遺跡 遺構検出状況 第二調査区（南から）



総持寺北遺跡 遺構検出状況 第一調査区（西から）



牟礼遺跡 第1調査区 SD-02 平鉢出土状況（東から）



牟礼遺跡 第1調査区 木製品集中部 SD-02 （東から）

## はじめに

わたしたちのまち茨木市は、大阪府の北東に位置し北は京都府龜岡市、東隣は高槻市、西と南は吹田市・摂津市に接していて、南北約18km・東西約8kmという南北に細長い市域となっています。

北半分は山間部で、平地となる丘陵上に紫金山古墳などの前期古墳があり、西国街道沿いには太田茶臼山古墳（繼体天皇陵）があります。

埋蔵文化財の遺跡の多くは南半分にみられ、南茨木駅付近には銅鐸の鋳型が出土した大集落の東奈良遺跡があります。この鋳型でつくられた銅鐸が、豊中市、豊岡市、普通寺市などから出土しています。また、茨木城のあった町中の梅林寺には秀吉の書状が残されており、椿の本陣として公開している郡山宿本陣には赤穂城主浅野内匠頭長矩が宿泊した宿帳があります。

このように、茨木の地は日本の歴史の中で、古代から他の地域との関連性を濃厚にもつ、重要な役割を担ってきた土地といえます。

また、北部丘陵の彩都の開発をはじめとして、市内の宅地の高度利用が図られ多くの共同住宅が建てられようとしています。現在行っている埋蔵文化財の発掘調査は、開発行為等に伴う緊急発掘調査ではありますが、発掘調査の目的は遺跡の記録を保存することであり、先住人の生活の様子を残すことです。

この冊子は、平成13年度に行った発掘調査についてその概略について述べたものです。

調査にあたって、惜しみないご協力をいただきましたご関係の皆様に深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護により一層の温かいご理解とお力添えを賜りますようお願い申しあげます。

平成14年3月31日

茨木市教育委員会  
教育長 大橋忠雄

# 目 次

## はじめに

例 言	1
茨木市内遺跡分布図	3
平成13年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	4

1. 総持寺北遺跡（東太田三丁目）	5
2. 中河原遺跡（上郡一丁目）	11
3. 宿久庄遺跡（藤の里二丁目）	14
4. 牟礼遺跡（中津町）	18
5. 溝咲遺跡（五十鈴町）	24
6. 茨木遺跡（元町）	30
7. 東奈良遺跡（奈良町）	36
8. 牟礼遺跡（中村町）	38
9. 牟礼遺跡（中津町）	42
10. 東奈良遺跡（沢良宜西一丁目）	46

## 挿図図面・挿図写真目次

第1図 総持寺北遺跡 各調査区遺構検出状況	第18図 茨木遺跡 出土瓦製土管実測図
第2図 " 遺構検出状況・遺構平面図	第19図 " 出土瓦実測図
第3図 西河原遺跡 各地区遺構平面図	第20図 " 各調査区遺構検出状況
第4図 " 各調査区遺構検出状況	第21図 " 出土土器実測図(1)
第5図 宿久庄遺跡 遺構平面図	第22図 " " (2)
第6図 " 各調査地域遺構検出状況	第23図 東奈良遺跡 遺構平面図
第7図 牟礼遺跡 検出遺構平面図	第24図 " 遺構而検出状況
第8図 " 出土土器実測図	第25図 牟礼遺跡 遺構平面図
第9図 " 各調査部分別遺構検出状況	第26図 " 第1期遺構而検出状況(西から)
第10図 溝咲遺跡(その3) 遺構平面図(1/100)	第27図 " 第2期 " (東から)
第11図 " 各遺構検出状況	第28図 " SD-02木製品・土器実測図
第12図 " 出土土器実測図(中世)	第29図 " SD-02木製品集中部出土状況
第13図 " 中世包帯層出土平瓦	第30図 " 第1調査区第2遺構南北東部落ち込み
第14図 " 出土錢貨	繩文晚期土器出土状況
第15図 " 自然流路出土土器実測図 (古墳時代前期初頭～後期)	第31図 " 繩文晚期土器実測図
第16図 茨木遺跡 遺構平面図・瓦製土管列検出状況	第32図 " 第2調査区出土土器・石棒実測図
平面図	第33図 " 各遺構平面図
第17図 " 西側調査区(下層面)・遺構検出状況(東から)	第34図 東奈良遺跡 遺構平面図
	第35図 " 遺構検出状況(西から)

## 用語解説等

SD：溝、河川 SB：湖立柱建物跡 SE：井戸 SP：石積み遺構、方形周溝墓

布留式期：天理市布留遺跡から出土した土器を基準とした時期区分で、おおよそ古墳時代前期から中期にあたる。

庄内併行期：豐中市庄内遺跡から出土した土器を基準とした時期区分で、おおよそ弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にあたる。

# 例 言

- この概報は、茨木市教育委員会が平成13年度に実施した発掘調査事業報告です。
- 平成13年度に実施した発掘調査に関しては、下記の方々のご協力とご指導・ご教示によるもので記して感謝の意を表します。

森岡 秀人（芦屋市教育委員会） 古川 久雄（撰陽文化財調査研究所）  
免山 篤（元茨木市文化財保護審議会委員）  
駒井 正明・鈴木 雅美（財団法人大阪府文化財調査研究センター）
- 本書に使用した地図は「国土地理院一／25,000高槻・吹田」・「茨木市地域計画図一／2,500」である。

## 平成13年度 埋蔵文化財発掘調査事業の概要

### 1. 平成13年度発掘調査事業

茨木市における平成13年度発掘件数は18件で、埋蔵文化財確認試掘・立会調査件数は169件ありました。発掘調査原因の事業別件数は、民間事業13件、公共事業5件でした。

公共事業は、道路・庁舎・消防用貯水槽設置などで、民間事業では病院の建設、共同住宅、マンション建設工事や老朽化した病院や倉庫の新築移転工事などでした。

発掘調査件数は前年と比較してやや多く、確認試掘・立会調査件数も増加傾向を示しています。特に、社員寮の廃止や工場・グラウンド跡地などが民間企業の用地転換や長期不況に伴って土地の売却・転売が進む一方、大阪・京都の大都市圏から近く、交通のアクセスや公共施設の充実等が住宅開発を活発化させている要因と思われます。

また、前年度に引き続き大規模開発事業件数の減少傾向とは反対に、当市における活発な開発事業が多いことを裏付けています。

### 2. 平成13年度発掘調査における概要

平成13年度において茨木市教育委員会が実施した発掘調査のなかで、注目したい調査としては、総持寺北遺跡・牟礼遺跡・茨木遺跡の調査などがあげられます。

総持寺北遺跡は、平成5年度に試掘調査で新たに発見された遺跡です。これまで、(財)大阪府文化財調査研究センターが平成6～9年度にかけて発掘調査が実施されており、7世紀から10世紀前半にかけての掘立柱建物を中心とした集落跡と中世の集落跡が検出されております。

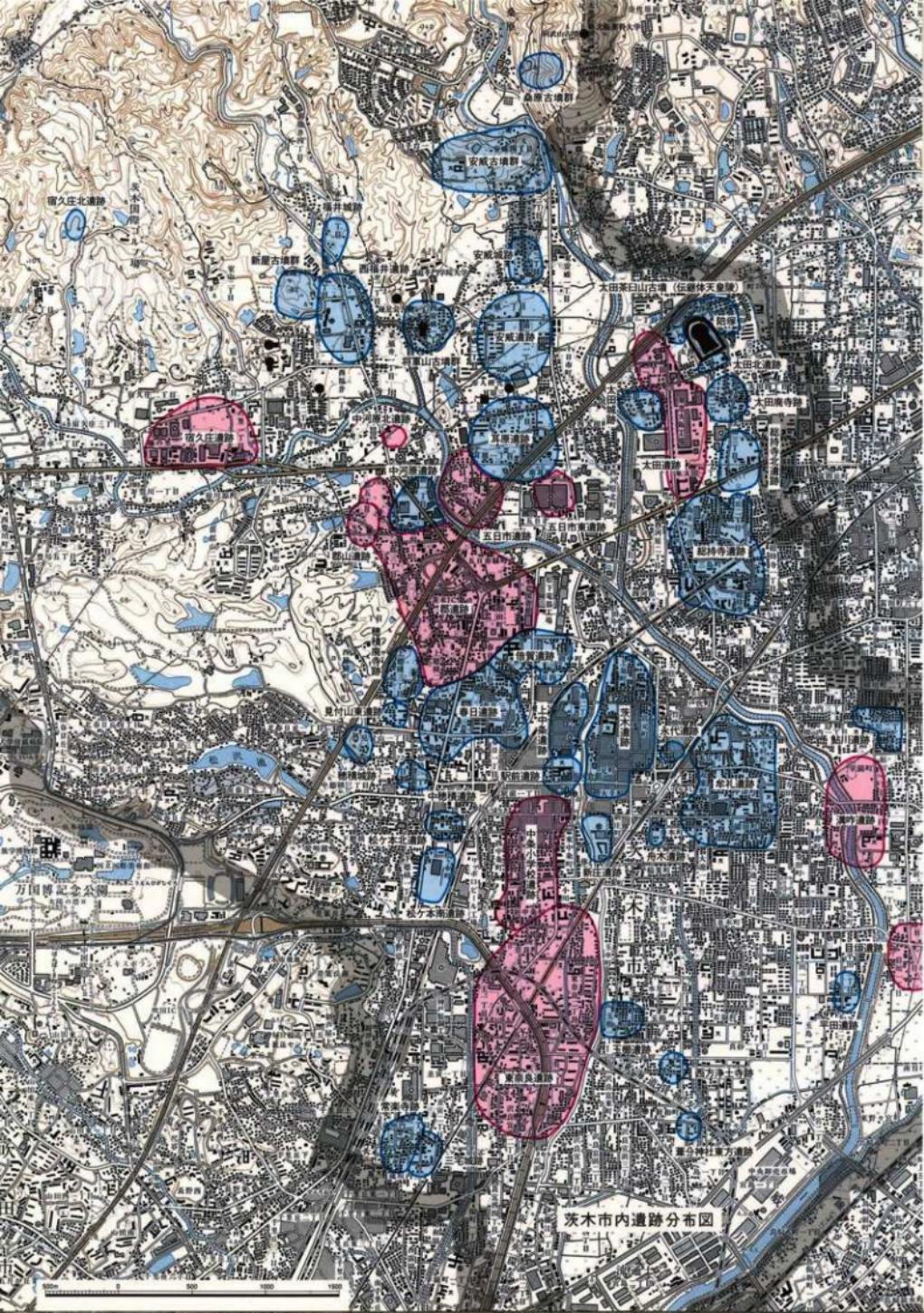
また、平成7・8年度には今回の報告地点の北側で茨木市教育委員会によって発掘調査が実施

されており、7世紀の土塙や奈良時代末～平安時代前期初頭の掘立柱建物そして中世の溝や土塙が検出されています。今回の調査は上記の調査地点の中間を埋め、本遺跡の全容を知る調査になりました。

検出した遺構として太田廃寺所用瓦と考えられる白鳳時代の摩滅した重弧文軒平瓦・丸瓦・平瓦と9世紀後半～10世紀の縁釉陶器などの土器類と一緒に出土した井戸や7～10世紀後半までの区画溝で囲まれた掘立柱建物が、14棟以上検出されています。総持寺北遺跡はこれまでの調査結果から7世紀から中世まで、途中、断絶期間を挟みながらも掘立柱建物で構成された集落が検出されています。新たに白鳳時代創建の太田廃寺そして平安時代前期創建の総持寺との関連性を考える資料が検出されたことは重要です。

牟礼遺跡は、昭和60年の第一次調査以後、点的な調査が間欠的に実施されてきましたが、本年度は3地点において発掘調査が実施されました。特に第一次調査で検出され話題になった縄文晩期と推定された自然流路と井堰がありましたが、今回の調査地点は、前回の調査地点の北東部にあたり、縄文時代晩期から弥生時代前期の明確な遺構と遺物が出土しました。また、上層面にて、これまで確認されていなかった古墳時代前期初頭（庄内併行期）の木製品を大量に廃棄した溝なども検出されました。牟礼遺跡において縄文時代晩期から弥生時代前期と古墳時代前期初頭（庄内併行期）の生活痕跡が確認された事実の意義は大きく、第一次調査で検出された自然流路と井堰の構築年代等を考えるうえで重要な資料となりました。

茨木遺跡は、中川清秀や片桐且元の居城として有名な茨木城を中心とする武家屋敷や町屋を含めた範囲（総構え）がほぼ現在の遺跡の範囲として重なります。これまで市街地の中に埋没しているため茨木城に関しての実態は永らく不明でした。今回、既存の建物によって当該地の大半が消滅していましたが、幸うじて敷地の一部で良好な遺構面を検出しました。特に排水用専用管としての瓦質の土管と下水用の専用管として竹管（桶）が検出されたことは、城下町における水の管理を物語る資料として貴重です。これらの下水用の専用管の存在は茨木城を中心とする城下町形成の都市計画の一端を示すものとして注目していい資料と思われ、現在の都市におけるインフラ整備に通じるものがあると思われます。



茨木市内遺跡分布図

**平成13年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表**

No.	遺跡名	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容	調査原因
1	絶持寺北遺跡	東太田三丁目地内	13.3.5~13.9.26	3,770m <sup>2</sup>	飛鳥・奈良・平安 石器・土師器・須恵器 陶磁器・黒色土器 瓦器・瓦	共同住宅建設
2	中河原遺跡	上郡一丁目179-1他	13.4.13~13.6.28	1,767m <sup>2</sup>	弥生・古墳 弥生土器・土師器 須恵器・方形周溝墓 溝	倉庫建設
3	宿久庄遺跡	藤の里二丁目470-2 他	13.5.15~13.7.20	1,867m <sup>2</sup>	中世 土師器・須恵器・井戸 掘立柱建物跡・溝	倉庫建設
4	牟礼遺跡	中津町562-2	13.5.14~13.7.7	750m <sup>2</sup>	平安・中世 土師器・須恵器 陶磁器	共同住宅建設
5	湧咗遺跡	五十鈴町地内	13.6.4~13.7.25	300m <sup>2</sup>	中世 井戸	道路
6	茨木遺跡	元町1611-1 他	13.7.17~13.7.25	40m <sup>2</sup>	中世 掘立柱建物跡	共同住宅建設
7	見付山東遺跡	見付山二丁目地内	13.7.26~13.11.16	3,090m <sup>2</sup>	旧石器・弥生・古墳 奈良・平安・中世・近世 石器・弥生土器・土師器 ・須恵器・陶磁器 ・掘立柱建物跡・井戸 墨書き土器「東宋(家)」	病院建設
8	東奈良遺跡	奈良町517-1	13.8.3~13.8.13	255m <sup>2</sup>	弥生・古墳 弥生土器・土師器 須恵器・柱穴・溝	マンション建設
9	牟礼遺跡	中村町493-1他	13.8.6~13.12.15	1,428m <sup>2</sup>	弥生 弥生土器・土師器 須恵器・水田・溝 自然流路・足跡	疗舎建設
10	牟礼遺跡	中津町872-2他	13.8.1~13.11.20	1,483m <sup>2</sup>	绳文・弥生・古墳 石器・绳文土器 弥生土器・木製品 彩文土器	共同住宅建設
11	東奈良遺跡	東奈良三丁目地内	13.10.29~13.11.8	30m <sup>2</sup>	弥生・奈良 石器・弥生土器 須恵器・溝・土塁・柱穴	防火水槽
12	東奈良遺跡	沢良宜西一丁目358-1他	13.11.19~13.12.4	472m <sup>2</sup>	古墳 弥生土器・土師器 須恵器	共同住宅建設
13	都遺跡	畑田町3-31	13.11.5~14.1.17	467m <sup>2</sup>	弥生・古墳・飛鳥・奈良 平安・中世 弥生土器・土師器 須恵器	コミュニティーセンター建設
14	都遺跡	畑田町103-1他	13.11.12~14.1.18	1,217m <sup>2</sup>	弥生・古墳・奈良・平安 中世・近世 石器・弥生土器・堅穴 住居跡・環濠・土塁墓	共同住宅建設
15	中条小学校遺跡	新中条町39-4	13.12.17~14.2.19	1,307m <sup>2</sup>	発掘調査中	共同住宅建設
16	東奈良遺跡	東奈良三丁目412-1他	14.1.22~14.3.11	315m <sup>2</sup>	〃	共同住宅建設
17	東奈良遺跡	東奈良三丁目地内	14.1.18~	620m <sup>2</sup>	〃	道路敷設
18	穂積庵寺	上穂積三丁目350-1他	14.3.7~	456m <sup>2</sup>	〃	共同住宅建設

No.7、11、13~18は後日の報告とします。

# 総持寺北遺跡

所在地 茨木市東太田三丁目地内

調査原因 マンション新築工事

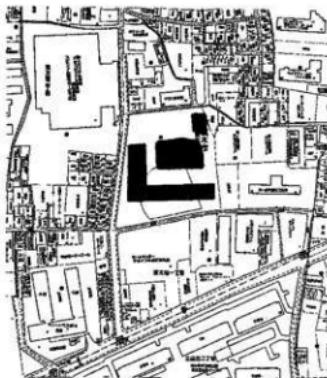
調査期間 平成13年3月5日～9月26日

調査面積 3,770m<sup>2</sup>

調査担当 中東 正之

## 調査結果

総持寺北遺跡は、平成5年に、当地の南方百数十m、国道171号線沿いの三島丘二丁目に位置する、第一勧業銀行茨木グランド跡地における、マンション建設に先立ち実施された、本市教育委員会による試掘調査により発見された遺跡である。



発見地点の発掘調査は、平成6年より(財)大阪府文化財調査研究センターが実施し、8世紀末頃の掘立柱建物群が検出されたのをはじめ、弥生時代から中～近世までの複合遺跡であることが判明している。さらに平成7年及び8年には、当地の近隣、東太田三丁目において、相次いでマンション建設に先立つ発掘調査が実施され、奈良時代末から平安時代初頭(8世紀末)頃の掘立柱建物群や7世紀後半までの遺構が検出されている。

これらの調査により、本遺跡は、三島丘三丁目から東太田一丁目～三丁目、すなわち、南の総持寺遺跡から北の太田廃寺、西の太田遺跡に挟まれた、これまで遺跡空白地とされた地区を埋めるものとして、包蔵地図上に、一応の範囲を示すことになったが、その後発掘調査が待たれていたものである。

当該地は、遺跡の推定範囲のほぼ中央部に位置している。平成6年の調査地と同じく、元第一勧業銀行のグランドであったが、グランド建設以前の地図を見ると、敷地東部に溜め池があり、今回の調査範囲と一部が重複している。平成12年11月、当地で試掘調査が実施され、敷地内に普遍的にひろがる包含層・遺構が確認された。これまでにも、当地の南側に隣接するホームセンターや自動車販売店の新築・改築に伴う試掘調査が実施されているが、結果的には、既設建物等により削平されており、遺構・遺物も確認できなかったため、未調査となっている。

本調査は、平成13年3月5日より、第一調査区(グランド南部)、第二調査区(グランド西部)、第三調査区(水泳プール東横)、第四調査区(グランド中央部)の順で実施した。空中撮影・空中測量は、6月26日に第一・第二調査区、9月14日に第三・第四調査区に対して実施した。

基本層序は、第一・第二調査区においては、上層より、現代積土層(約50cm)、褐灰色砂質土(20～30cm中世遺物包含層)、明黄褐色砂質土(約15cm)、暗灰黄色砂質土(約15cm奈良時代末～平安時代前半の遺構包含層)、黒褐色粘質土(3～5cm古墳時代後期～奈良時代初頭の包含層)、明黄褐色礫混土(地山層・遺構検出面)となる。第三・第四調査区の基本層序もこれに準

するが、遺構検出面の標高は、南から北へ23.8m～24.5mと0.7mもの比高差があるため、層序各層も北に向けて斬減もしくは消失する。また、遺構面の削平もみられる。

検出遺構は、全調査区あわせて、古墳時代後期から中世の溝約50条、井戸2基、土塙約40基、柱穴・ビット500個以上を数える。掘立柱建物は、第一・第二調査区で13棟、第四調査区で1棟をまとめたが、これ以上にも建物とおぼしき柱列の並びが多い。以下、建物群を中心に概説する。

第一・第二調査区では、東西に走る溝（SD-6・8）を境界として、南側のやや繁雑な並びの建物群に比べ、北側では、ほぼ正確な南北軸を示して比較的大型の総柱建物群が並んでおり、その北側に倉庫跡らしき2棟（SB-10・11）も存在する。

これらの建物は、全般に遺物の出土量が少ないため、時期比定が困難であった。古くは7世紀後半に遡る可能性のある建物もあるが、多くは、本遺跡内の既往の調査でも同時期の建物群が確認されており、奈良時代末から平安時代初頭（8世紀末）頃に比定してよいと判断される。また、第一・第二調査区南西隅には、平安時代後期から中世の遺構が集中しており、ここに平安時代後期の建物（SB-7）をまとめることができる。

第三・第四調査区では、中世の鋤溝や7世紀後半頃の集石土塙などを検出したが、遺構は比較的少なく、掘立柱建物も一棟しかまとめられなかった。また、埋没溜め池が遺構面を大きく占めていた。しかし、調査の結果、この池を正確に縁取るように溝（SP-1・3）が廻っており、溝内の遺物から、少なくとも中世には池が存在した可能性があることが判明した。溜め池としては、グランド建設以前まで存在しており、もともと池や落込みであったものを、後世に溜め池に改修したものと判断される。圓池であった可能性など指摘できるか、建物群との関係は不明である。

他の主要な遺構としては、第一・第二調査区の2基の井戸（SE-1・2）がある。

SE-1は、第二調査区（掘立柱建物）SB-9の北西角に位置する。上面円形を呈する素堀りの井戸で、二段の堀方を有し、直径2.5m、深さ1.6mを測る。埋土は5層に分かれ、上師器、須恵器、綠釉陶器（10世紀後半）などとともに重弧文軒平瓦をはじめ、平瓦、丸瓦が出土した。

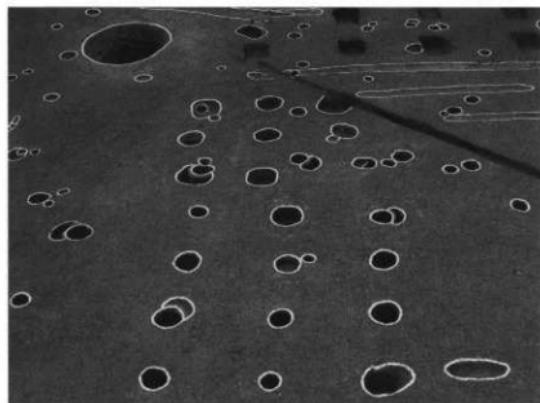
SE-2は、第一調査区東側、溜め池近くに位置する。上面やや歪な円形を呈する素堀りの大型井戸で、二段の堀方を有し、直径4.5～5.2m、深さ2.8mを測る。埋土は9層以上に分かれれるが、中層上位に強固な礫泥粘土層があり、それより上下で土層の様相が異なる。井戸としては7世紀後半に遡る可能性があり、一旦廃絶されたものの、奈良時代末から平安時代前半には、集石土塙状を呈したなんらかの施設として使われていたものと判断される。

遺物総量はコンテナパッド11箱で、包含層出土の古墳時代から中世にわたる上器類が大半を占める。上師器、須恵器、埴輪、瓦、黒色土器A類上器、瓦器、陶器、灰釉陶器、綠釉陶器、磁器、石器などのほか、第一調査区（掘立柱建物）SP-283埋土内より、円面鏡の破片が出土している。

本調査の結果、当地では7世紀後半頃の遺構群、奈良時代末から平安時代初頭（8世紀末頃）の建物群、平安時代後期の建物などを検出した。平成6年からの（財）大阪府文化財調査研究センターの調査、平成7・8年の本市教育委員会の調査と同じく、8世紀末頃の掘立柱建物群が検出されており、同時期の集落域が当地まで広がっていた可能性が高い。また、10世紀後半頃の井戸内からではあるが、平成7・8年度調査地に統いて、7世紀後半の太田庵寺所用のものとほぼ断

定できる瓦が出土したこと、明確な建物等は示せないが、同時期の多くの遺構を検出したことにより、当地まで同寺に関連した施設があった可能性がある。

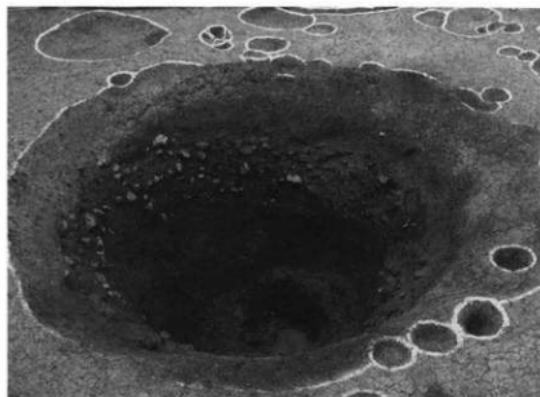
また、円面鏡など、官衙的性格の施設の存在を伺い知ることのできる遺物も出土しており、官衙街が、国道171号線の南から当地まで広がっていた可能性もある。今後の更なる発掘調査、特に包蔵範囲の西部から北西部の調査に期待したい。



第2調査区 SB-10・11及びSE-1検出状況（東から）



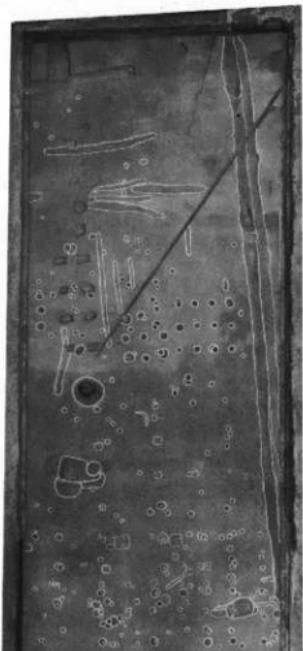
第1・第2調査区 SD-6・8検出状況  
(西から)



第1調査区 SE-2検出状況（南から）

第1図 総持寺北遺跡 各調査区遺構検出状況

第二調査区

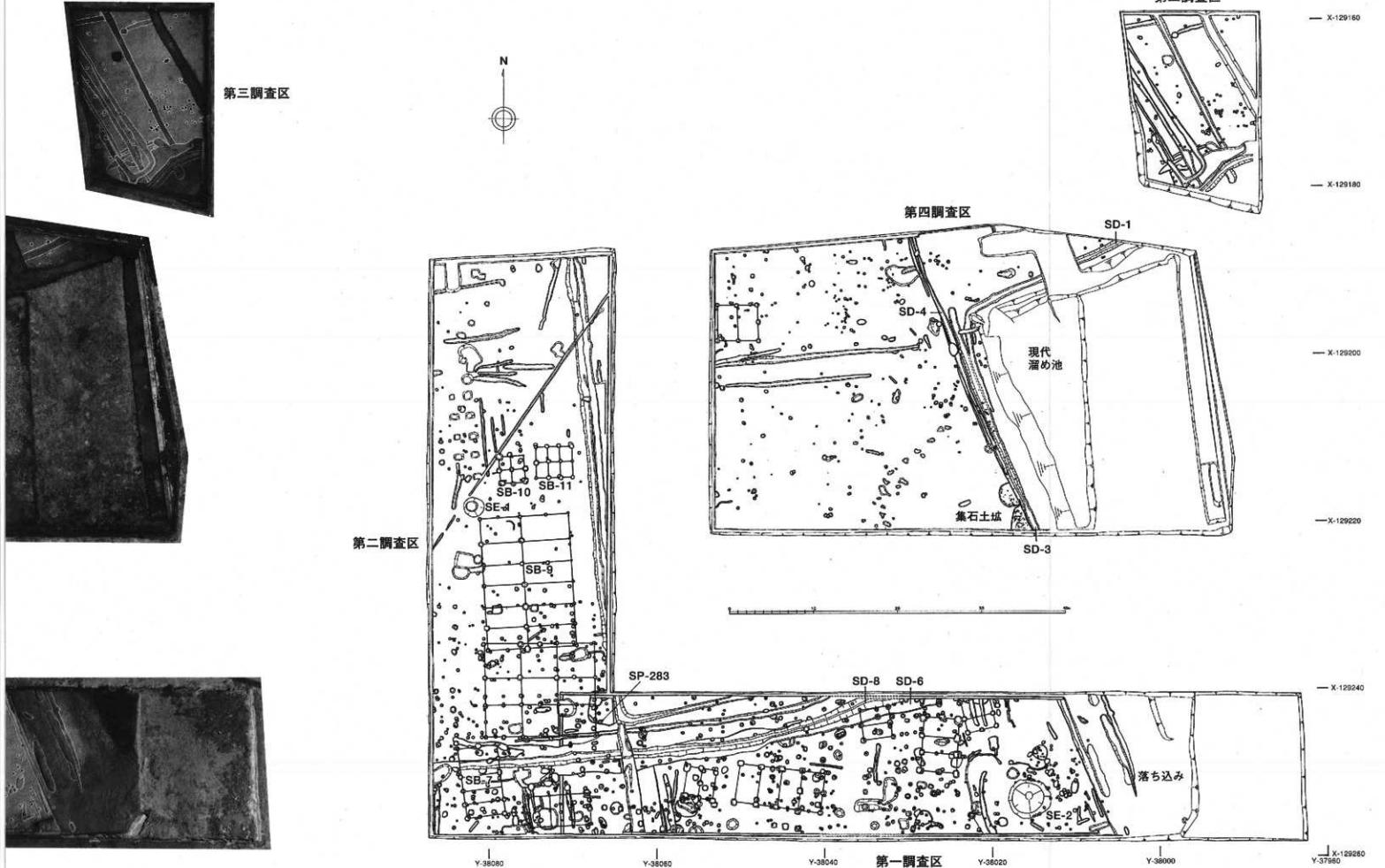


第四調査区



第一調査区





第2図 総持寺北遺跡 遺構検出状況・遺構平面図

# 中河原遺跡

所在地 茨木市上郡一丁目179-1他

調査原因 倉庫建設

調査期間 平成13年4月13日～平成13年6月28日

調査面積 1,767m<sup>2</sup>

調査担当 宮脇 薫

## 調査結果

中河原遺跡は市域のほぼ中央部に位置している。遺跡の北から東に勝尾寺川と佐保川が合流した茨木川が流れている。遺跡の南は嶋下郡衙を推定されている郡遺跡がある。茨木川の対岸の舌状に張り出した台地上には耳原遺跡が存在する。

調査は、現時点においても倉庫営業活動が行われており、既存建物の関係から解体を含めて3地区に分割しての調査となった。

## 調査の結果

基本層序は、西から東にかけて旧地形が下がっていることから、西の調査区では約2.5m、東調査区では約3.7m盛土がされていた。耕土、床土の下層に約40～65cmの暗灰色砂質土層が堆積しており、その下層の灰色粘土が遺構面となっている。

### A地区

調査区の北で、幅が約1.7～2mの、深さ約52cmの北から東に蛇行しながら流路の溝が検出された。溝内から弥生時代中期～弥生時代後期の土器が出土した。その他、中央で直径が約28cmの円形の柱跡が検出された。

### B地区

調査区の中央部で、直交する状態で幅が約45cmの溝が2条検出された。溝-1から弥生時代中期の高杯、壺の破片が出土した。2条の溝は、一辺の幅が3.5m以上の弥生時代中期の方形周溝墓の周溝と考えられる。

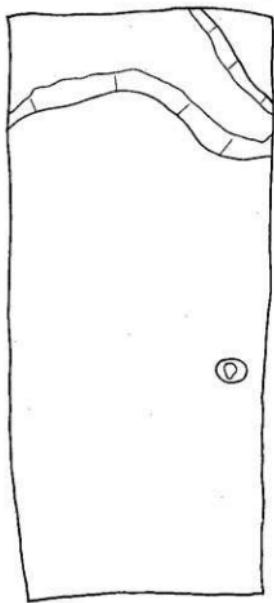
### C地区

調査区全域に、4条の溝が交差するように検出された。調査区の北東部では、深さ約50～60cmの落ち込みあるいは、自然湿地状の遺構が検出された。いずれの遺構からも弥生時代から古墳時代の遺物が出土した。

## まとめ

今回の調査によって、調査地域の西から東に千里丘陵の末端が徐々に地形を下げていることが判明し、集落の南側は弥生時代の墓域であったと考えられる。

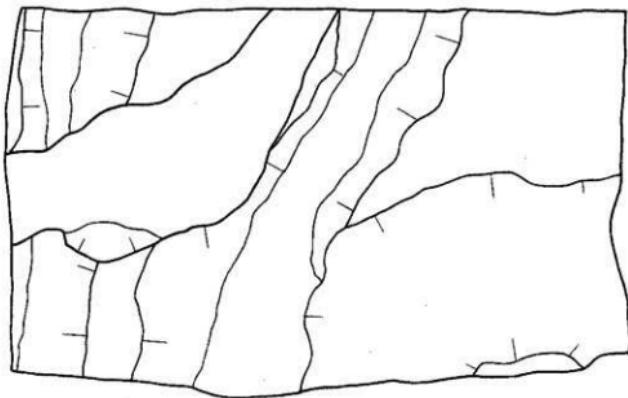




中河原遺跡 A地区 遺構平面図



中河原遺跡 B地区 遺構平面図



中河原遺跡 C地区 遺構平面図



第3図 中河原遺跡 各地区遺構平面図



中河原遺跡 C調査区 遺構検出状況（南から）



中河原遺跡 B調査区 遺構検出状況（北から）

第4図 中河原遺跡 各調査区遺構検出状況

## 宿久庄遺跡

所在地 茨木市藤の里二丁目470-2他

調査原因 倉庫建設

調査期間 平成13年5月15日～平成13年7月20日

調査面積 1,867m<sup>2</sup>

調査担当 宮脇 薫

### 調査結果

宿久庄遺跡は市域の西部、勝尾寺川の左岸に位置している、弥生時代から中世の複合遺跡である。右岸には、宿久庄西遺跡、箕面市庄田遺跡がある。東の老ノ坂山地の山麓部は、紫金山古墳、海北塚古墳、新屋古墳群等の古墳が分布している。南の千里丘陵沿いには西国街道が通っている。西国街道の勝尾寺川の左岸には、徒然草に語られているぼろ塚が比定されている。

### 調査の結果

調査区の基本層序は、約1.2～1.5mの盛土、耕土20～25cm、5cm床土、茶褐色土（包含層）となっている。遺構検出面のベース土は黄褐色砂礫層及び黄褐色土である。

### 掘立柱建物

掘立柱建物-Iは、4×5間の縦柱建物である。

掘立柱建物-IIは、2×3間の建物である。

掘立柱建物-IIIは、2×2間以上の建物である。

掘立柱建物-IVは、2×2間以上の縦柱建物である。

掘立柱建物-Vは、2×2間の建物である。

掘立柱建物-VIは、3以上×2間以上の建物である。

掘立柱建物-VIIは、3以上×2間以上の建物である。

掘立柱建物-I～IIIの建物が同一方向であり、掘立柱建物IV～VIIが同方向であり二時期に別れると考えられる。

### 溝

掘立柱建物-Iを取り囲むように3条の溝が検出された。溝-Iは掘立柱建物-Iの東で検出された。幅15～20cm、深さ約7～15cmを測る。溝-IIは北で検出された。幅が25～40cm、深さ約7～15cmを測る。溝-IIIは西で検出された。幅が25～35cm、深さ7～15cmを測る。溝-II、IIIは、ほぼ同規模であり、溝-Iは溝-II、IIIより小規模であるが3条の溝は性格が同じであると考えることができる。



## 井戸

掘立柱建物-Iの東に隣接して検出された。人頭大の川原石を積み上げた石組み井戸である。径が約2m、深さ2.7mを測る。井戸内より、土師器皿、瓦器碗が出土した。土師器皿片に文字は不明であるが墨痕が認められるものが出土している。男根状の木製品が出土している。

## 石組造構

溝-IIの北で検出された。人頭大の川原石で直径約1.5mの円形に敷き詰められている。敷き詰められた上面はほぼ水平になっている。

## 土塙-I

溝-IIの北で、石組造構の西に隣接して検出された。径が約1mの不整形の円であり、底面に不規則であるが拳大の川原石が敷き詰められていた。壁面・底面及び川原石が焼けた状態で検出されている。

## 土塙-II

径が約2m、不整の円形の形態で検出された。瓦器碗、土師器皿は底部を上にした状態で検出され、その上に5枚以上の銅錢、白磁の合子が検出された。

## 柱跡

径が20~30cmの円形の柱跡が検出された。一部の柱跡からは、1~3枚の土師器皿が埋納された状態で出土した。

いずれの遺構の時期も出土した遺物等から12世紀中葉~13世紀前半の時期と考えられる。

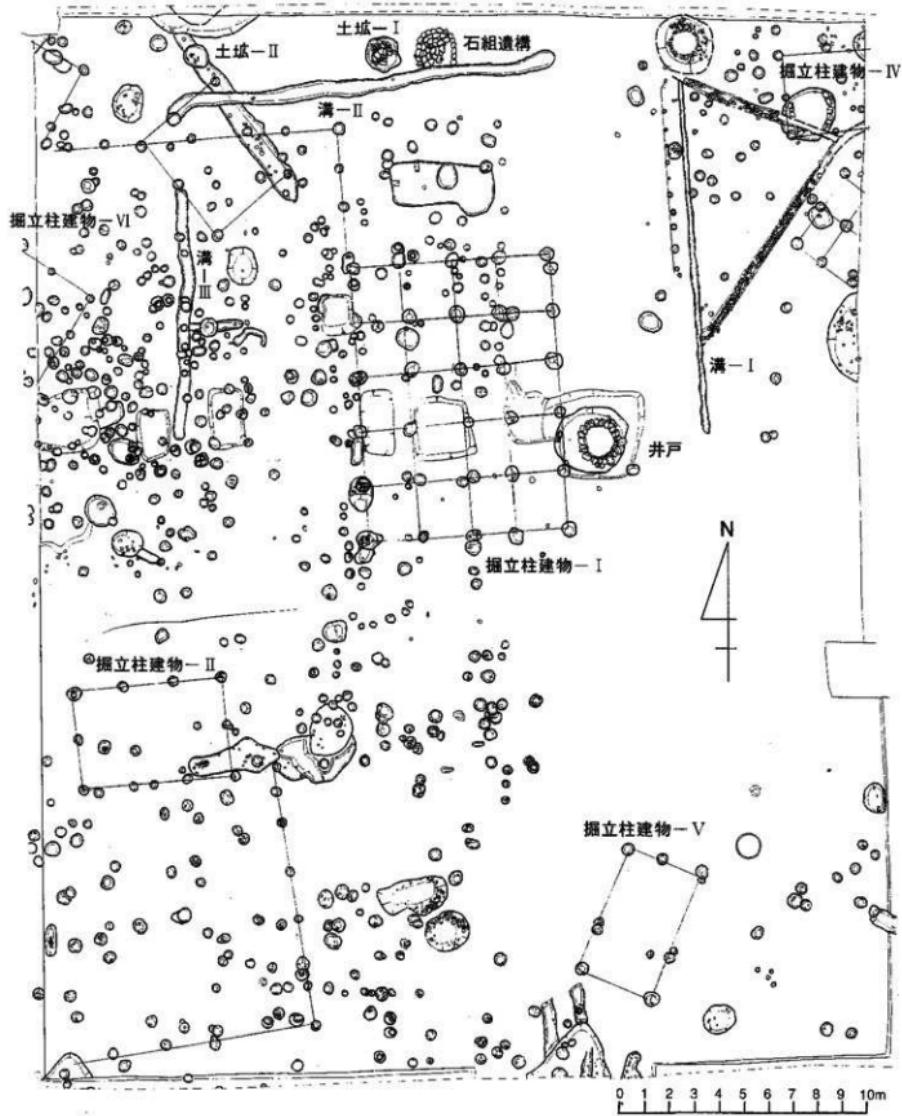
その他の時期の遺構として、調査区の北東部から出土遺物により近世以後と考えられる遺構が、一部直交している石組の暗渠及び井戸が検出されている。

## まとめ

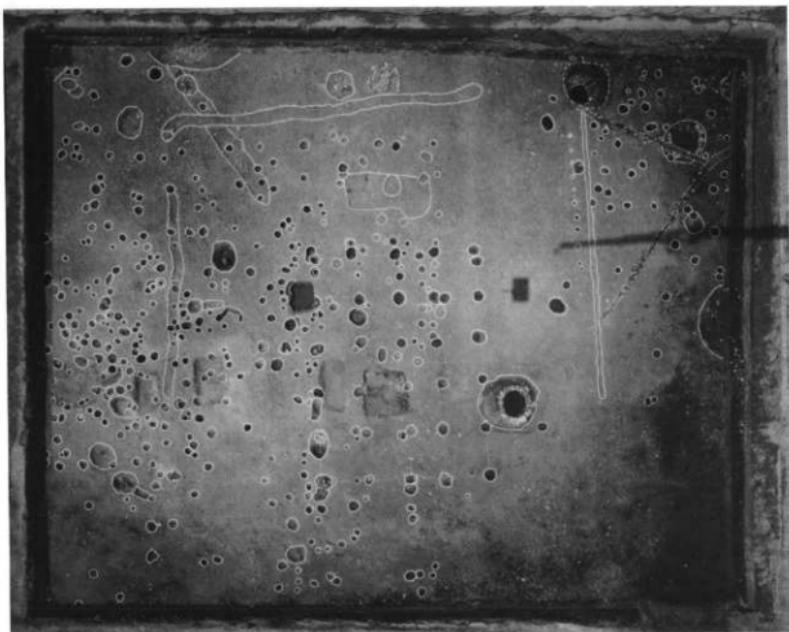
今回の調査において、12世紀中葉~13世紀前半の多くの遺構及び遺物が検出された。また、堀立柱建物-Iは総柱建物で、東、北、西の3方向を溝に囲まれた屋敷地に建てられている。また、堀立柱建物-Iに関係があると考えられる井戸-Iは、規模が大きく石組であり、井戸内の出土遺物である墨痕のある土師器の皿や男根状の木製品からみても、この調査地は耕作者などの住居地ではないようである。

土塙-IIは火葬墓と考えられる。内部より、土師器皿、瓦器碗の他に銅錢及び当時においては、珍しい白磁の合子が副葬されている。この時期としては普遍的ではない火葬をしていたことなどから上級階層の人の墓と考えられる。

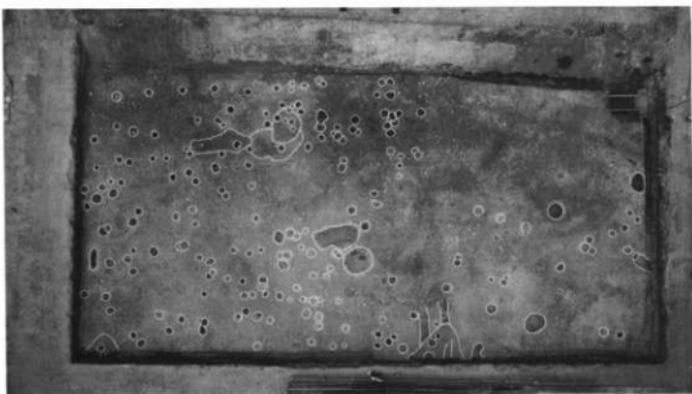
掘立柱建物-I、土塙-IIは同一時期であり、関連するものと考えられ、4×5間の総柱立建物と、仏教的思想を窺えられる火葬墓とから、掘立柱建物-Iは仏堂あるいは仏庵等の施設の性格を考えなければならない。今回の調査結果から調査地点の北部及び西部の遺跡の広がり状況も注目される。



第5図 宿久庄遺跡 遺構平面図



宿久庄遺跡 遺構検出状況（北地域）



宿久庄遺跡 遺構検出状況（南地域）

第6図 宿久庄遺跡 各調査地域遺構検出状況

## 牟礼遺跡

所在地	茨木市中津町562-2
調査原因	マンション建設工事
調査期間	平成13年5月14日～平成13年7月7日
調査面積	750m <sup>2</sup>
調査担当	濱野俊一
調査結果	

牟礼遺跡は市域の東部、元茨木川と安威川に挟まれた沖積地に立地している。遺跡の範囲は東西250m、南北500mに広がり、中津町・舟木町・中村町を中心に広がる集落遺跡である。牟礼遺跡については、昭和60年の大型店舗建設に伴う試掘調査によって中世の須恵器・土師器・瓦器片が出土したことが遺跡発見の端緒である。この試掘調査の結果をうけ第一次調査が実施され、自然流路に架設された井堰と水田面と推定された黒色粘土層が検出されている。この自然流路に架設された井堰の上流側の砂層とその下層から滋賀里IV式～長原式の土器が出土したことによって井堰の構築年代が縄文時代晩期と推定された。その後、周辺地域において発掘調査が実施されている。平成8年度には第一次調査地点の東側の中津町で自然流路の一部が検出され、縄文時代晩期の土器の出土はなく、弥生時代前期を主体とする遺物が流路内から出土している。また、平成10年度には南側に位置する舟木町の調査では、中世から近世にかけての水田面が検出され溝と大小の畦畔が検出されている。しかしながら、平成10年度の舟木町の調査時に昭和60年に水田面と推定された黒色粘土層から摩滅した弥生時代前期の土器が出土した以外はいずれの調査地点でも縄文時代晩期の遺構・遺物は出土しなかった。

今回の調査地点は牟礼遺跡の中でも東端部にあたり、溝昨遺跡とは市道を挟んで隣接している。当該地は、調査以前は社員寮と付属する駐車場があった。調査は、建物建築部分と立体駐車場部分に調査区を設定した。基本層序としては盛土層・近世水田層・床土層直下にシルト系の土質を主体とする平均3層以上の中～近世の包含層が堆積している。遺構は各堆積層から切り込んだ複数の時代の遺構が確認されたが、社員寮が存在していた部分は搅乱が著しく、最終面にて一括検出作業をおこなった。また、駐車場部分に関しては中世の二時期にわたる遺構面を検出した。以下、検出遺構については立体駐車場部分と建物建築部分を一括記述する。上層面では、東西方向に走る唐勧による鋪溝と人や牛などの多数の足跡を調査面全面にて検出した。鋪溝は幅が平均20cm前後で、深さは深い所4～5cm前後と浅く、断面はU字形を呈し、埋土には明灰色粗砂が堆積している。足跡は法量等もまちまちで子供のものと思われる。埋土も鋪溝と同じ明黄褐色砂質土が堆積している。上層水田面は被覆している明黄灰色粘質土層は瓦器等の土器を含み、出土遺物から13世紀前後の水田面と思われる。下層面も上層面と同じく、東西方向に人や牛など多数の足跡を検出したが、田畑の地割が上昇面と違っている。調査区中央に区割り溝と思われる幅70cm前後、深さ40cm前後の断面が逆台形を呈する東西溝を検出している。この東西溝は調査区



の中央部よりやや西から始まっており、東に向かって深く傾斜している。また、東西溝の西端は足跡と小規模な溝以外、目立った遺構は検出されなかった。このため、畠もしくは集落と区切る空閑地と思われる。上層水田面は被覆している洪水堆積層と思われる灰褐色粗炒層内と鋤溝内の土器等の遺物から11世紀前後の水田面と思われる。出土遺物は水田面のみの調査の割に多く、時期幅もありバラエティーに富んだ土器が出土している。出土土器の大半が遺物包含層から一部、鋤溝内や水田面を被覆する洪水砂からも出土している。出土土器は平安時代後期の黒色土器B類の椀・「ての字状口縁」の土師器の皿そして中世の遺物として土師皿・瀬戸焼の皿・東播系須恵器の捏鉢・瓦質の羽釜・白磁碗・瓦器等を主体とし、輸入陶磁器の15世紀まで下がる龍泉窯系線刻縞蓮弁文青磁碗から平安時代後期まで遡る土師器の羽釜まで出土している。また、弥生上器・古式土師器や古墳時代から奈良時代までの須恵器・土師器が比較的多く出土しており当該期の集落の存在を考える遺物も出土している。また、めずらしいものとしては土鉢や播磨地域に多い土師質の叩き痕跡を残す土鉢などが出土している。

### まとめ

今回の調査では、中世水田面の調査が主体となったが、新たな考古学的知見が得られた。特に、上層面では鎌倉時代の13世紀を中心とする水田面そして下層面では平安時代後期の11世紀前後の水田面が検出されたことは意義が大きい。今回検出された水田は、牟礼遺跡の集落の水田と考えられるよりも近接する溝跡の集落の水田と考えられる。特に、平成12年度調査で検出された平安時代後期から中世の集落から直線距離で400m弱しか離れておらず、同集落に伴う水田と思われる。そして、本年度の調査で平成12年度調査地の西側では地形的に同集落が立地する微高地の裾部が検出され、一部、西側に広がる中世水田面が検出されている。特に、水田面の調査の割に出土遺物が多いことも近隣に集落が存在していることを示している。平成12年度の調査で検出された集落は、文献資料上にたびたび登場する溝跡（杭）庄の一部と考えられている。溝跡（杭）庄の文献資料上の成立時期は11世紀前後と考えられるので、今回、検出した下層水田面に比定できると思われる。また、近年、弥生時代から近世までの複数時期に渡る大規模な水田の調査が増加しており、今回、検出された唐鋤による鋤溝や人や牛などの足跡の精緻な研究も進んでいる。茨木市においても、溝跡や玉櫛遺跡において水田面の調査事例が増加しているが、まだまだ面的な調査をすることが少なく、当時の景観を復元できるまでに至ってはいない。今回の調査では牟礼遺跡と溝跡との間に広がる中世の村落状況の一端を知る手掛かりとなった。

註) 茨木市教育委員会「平成12年度発掘調査概報」瀧野 俊一「溝跡（その1・2）」

### 参考文献

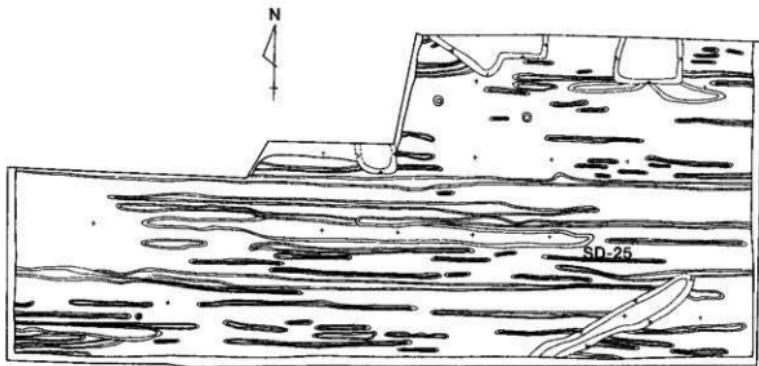
雄山閣 季刊考古学第15号 宮脇 薫「繩文晩期の水田跡 大阪府牟礼遺跡」昭和61年5月1日

(財) 大阪府文化財調査研究センター「溝跡（その1・2）」・「溝跡（その3・4）」

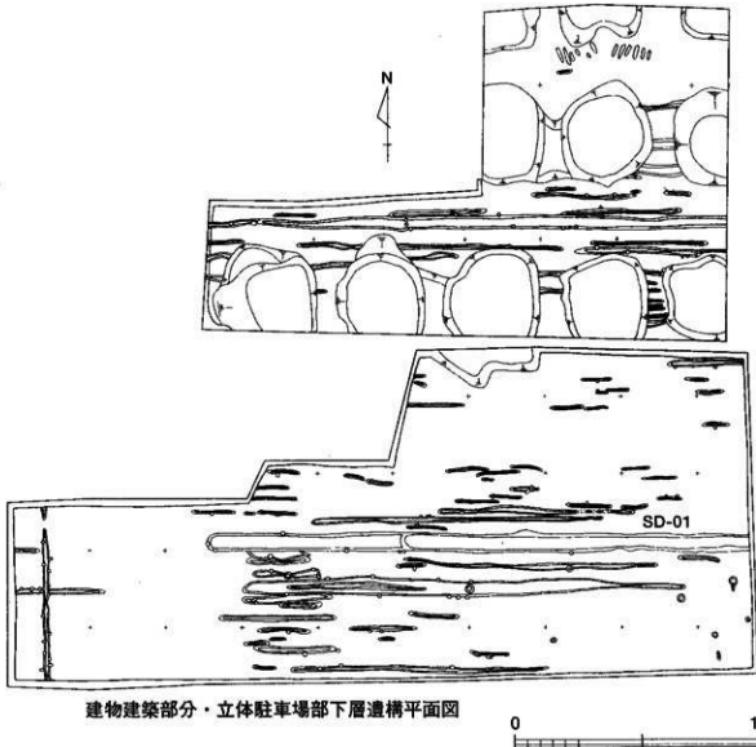
平成12年3月31日

大阪府教育委員会「玉櫛遺跡発掘調査概要・I」平成5年3月31日

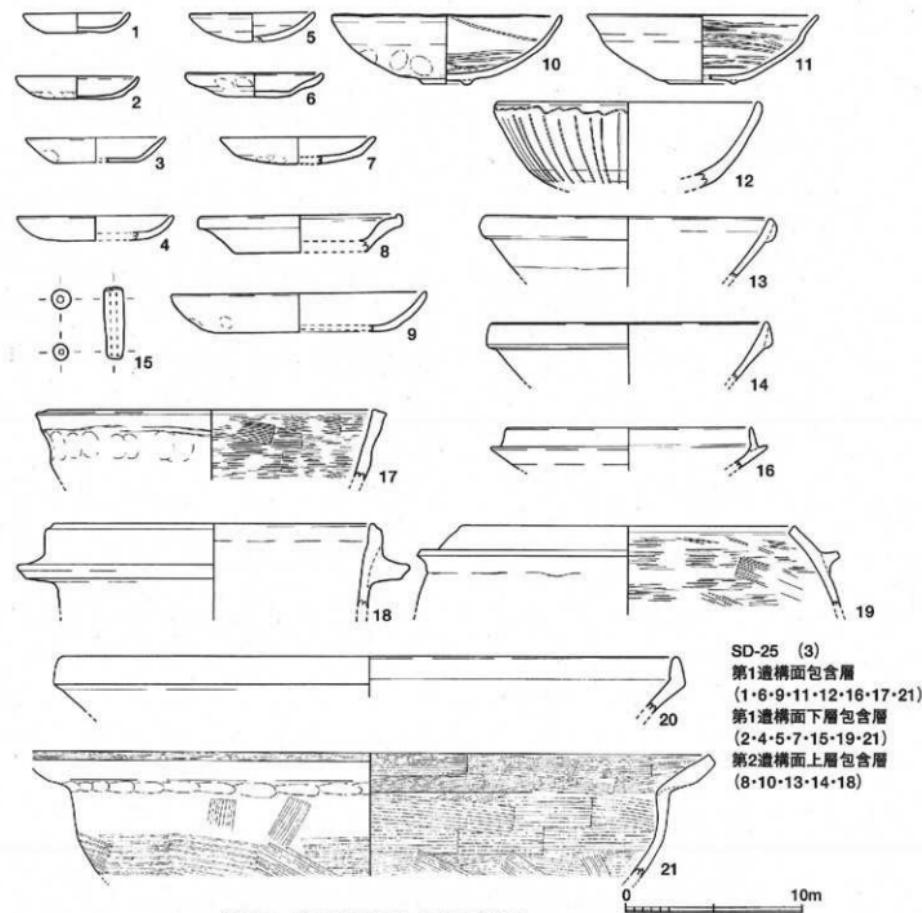
(財) 大阪府文化財調査研究センター「玉櫛遺跡」平成10年3月31日



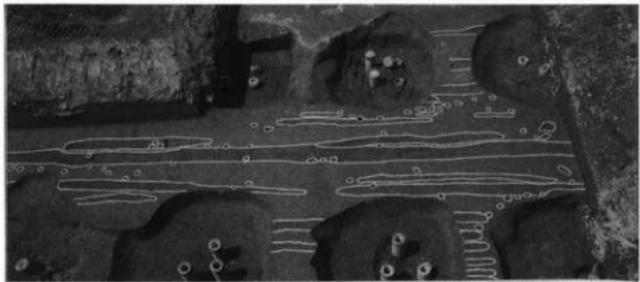
建物建築部分上層遺構平面図



第7図 牟礼遺跡検出遺構平面図



第8図 牟礼遺跡出土土器実測図



立体駐車場部分（下層面）遺構検出状況（南から）



立体駐車場部分(下層面)遺構検出状況  
(西から)



建物建築部分(上層面)遺構検出状況  
(東から)



建物建築部分(上層面)遺構検出状況(南から)

第9図 牟礼遺跡 各調査部分個別遺構検出状況



建物建築部分(下層面)遺構検出状況(東から)



建物建築部分(下層面)足跡等検出状況(西から)



建物建築部分(下層面)SD-01断面(東から)

## 溝昨遺跡（その3）

所在地 茨木市五十鈴町地内

調査原因 市道敷設工事

調査期間 平成13年6月4日～平成13年7月25日

調査面積 300m<sup>2</sup>

調査担当 渡野俊一

調査結果



溝昨遺跡は市域の東部、安威川を挟んで両岸に位置しており、現在の五十鈴町、学園町、学園南町、新堂一丁目にかけて広がる集落遺跡である。遺跡の範囲は東西250m、南北500mに広がる。溝昨遺跡については、戦前から安威川付近で遺物が採集されていたが、昭和32年安威川の河川改修工事に伴って先鉢橋周辺から瓦器碗が出土したことが遺跡発見の端緒である。その後、長らく、<sup>(註1)</sup>大規模な発掘調査が実施されていなかったが、平成7年から平成11年にかけて実施された大阪体育大学(浪商学園)跡地において住宅・都市整備公団の大規模集合住宅建設工事に伴って(財)大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施している。<sup>(註2)</sup>調査の結果、弥生時代前期から中世・近世までの遺構と遺物が検出された。主要な遺構としては弥生時代後期の土器棺は古墳時代前期の竪穴住居跡・井戸・溝・土塁等が、そして古墳時代前期から近世にかけての水田跡が検出されている。また、溝昨神社上宮跡が検出され中世まで創建が遡ることが判明している。遺物としては、銅鏡・人面線刻土器などが出土している。特に、古墳時代前期の関東・東海・山陰・瀬戸内地域などの外来系土器が多数出土していることは注目される。

溝昨遺跡は、文献資料上にたびたび登場する溝昨(杭)庄にあたる。15世紀初めの応永14年の『長講堂領目六』に「府分、摂津国溝杭庄年貢未定」とみえ、「尊卑分脈」には溝杭源氏の祖・資兼の時には「外家の所領を相伝するに依って、摂津国溝杭に住し、溝杭大夫」と称したことが記述されている。この様に文献資料上に登場する溝昨(杭)庄は11世紀ごろには成立していたと考えられてきた。平成6年度に溝昨遺跡の南東端の新堂一丁目において小規模なトレンチ調査によって平安時代後期から鎌倉時代の黒色土器B類の碗や瓦器碗が出土している以外は、まったく当該期の集落は検出されていなかった。しかしながら平成12年度に今回の報告をする調査地点の東側で文献資料上に現れる時期と一致する平安時代後期から鎌倉時代の集落跡を検出した。同集落は掘立柱建物を中心に井戸や溝で構成されており、安威川が形成した微高地に立地している。そして微高地の東側では旧安威川の自然流路跡を検出した。また、上記以外にも近世の溝で区画された屋敷跡や旧安威川の自然流路跡が埋没後に造られた堤跡そして三島地域では、最古になる前期弥生土器の一群を検出している。

当該地は、平成12年度調査地点の西側に位置しており、調査以前は木造個人住宅と駐車場であったが、用地買収後は住宅は解体され裸地になっている。調査は、車道部分に東西に長い調査区を設定し、残土を場内処理するため調査区を半分に分割しての反転調査となった。

基本層序としては東端部では盛土層・近世水田層・床土層直下にシルト系の土質を主体とする平均3層以上の中～近世の包含層が堆積している。しかしながら、調査区の中央部からは微高地が少しづつ下がっており、西端部では床土層直下にまったく違った土層堆積を示している。遺構は各堆積層から切り込んだ複数の時代の遺構が複数面で確認されたが、以下、一括して検出遺構について記述する。近世段階の遺構としては、長方形土塙を3基検出した。長方形土塙は平成12年度調査や(財)大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施した大阪体育大学(浪商学園)跡地においても検出されている。規模はすべての長方形土塙の両端が調査区外に延びているため不明であるが、法面がほぼ垂直に切られており、埋土は灰褐色粗砂で充填している。出土遺物は大半が摩滅した土器であるが、一部、近世瓦片や近世陶磁器片が若干、出土しており所属時期を決定しにくいが、過去の調査例と切り込んでいる層位から大半の長方形土塙は近世の所産と考えられる。ただし、長方形土塙-2及び長方形土塙-3は近世遺物は出土しておらず中世の土器しか出土していないため、中世まで遡る可能性がある。

中世以前の段階の遺構としては、水田耕作に伴う唐鋤による鉢溝・上坑・落ち込みそして微高地の裾を流れる溝を調査区の西端で検出した。

中世以前の段階の遺構としては、調査区の東側で自然流路を確認した。自然流路の形成時期は不明だが、最終埋没時に古墳時代前期の土器群(布留式期)が投棄された状態で検出されている。

出土遺物としては平安時代後期の12世紀まで遡る楕葉型瓦器椀や「ての字状口縁」の土師器の皿などが出土している。中世の遺物としては瓦器椀・土師皿・東播系須恵器・備前焼摺鉢等を主体とし輸入陶磁器の青磁皿、白磁碗が出土している。自然流路からは古墳時代中期(布留式期)の上器から古墳時代前期初頭(庄内併行期)まで遡る土器が出上している。特殊な遺物としては、調査区の西側の微高地の裾に向かって堆積する青灰色砂質土層から真書体の「皇宗通寶」(北宋銭・初鑄年1038年)が1点出土している。

### まとめ

今回の調査では、平成12年度調査で確認された集落の続ぎが検出されるものと期待されたが、集落は前回の調査地点の西端で途切れ、西に向かって集落の存在する微高地が地盤を下げてゆき集落外になることが判明した。このため平成12年度調査で確認された集落は北と南に遺構・遺物が広がることが確定的になったことの意義は大きい。特に、旧安威川が形成した微高地上のみに集落が営まれ、低湿地部は水田などに利用されていることが判明した。中世の溝(杭)庄の景観を考察するのに重要な資料を提示することとなった。

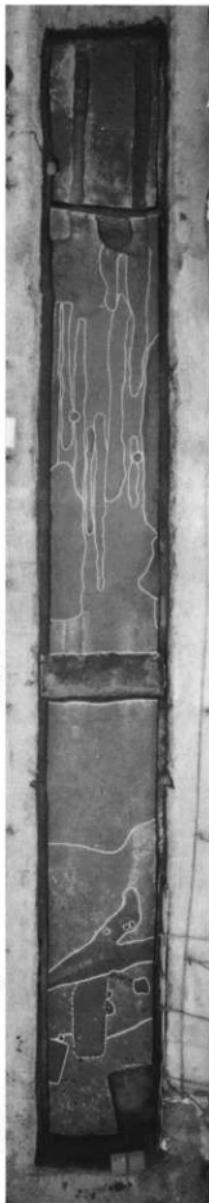
(註1) 古代学研究会『古代学研究第55号 免山 篤「茨木市溝(杭)庄付近出土の瓦器」昭和44年8月

(註2) (財)大阪府文化財調査研究センター「溝(杭)庄跡(その1・2)」「溝(杭)庄跡(その3・4)」平成12年3月31日

(註3) 茨木市教育委員会『平成12年度発掘調査概報』濱野 俊一「溝(杭)庄跡(その1・その2)」平成13年3月31日

西側調査区

落ち込み 溝 長方形土壙-1



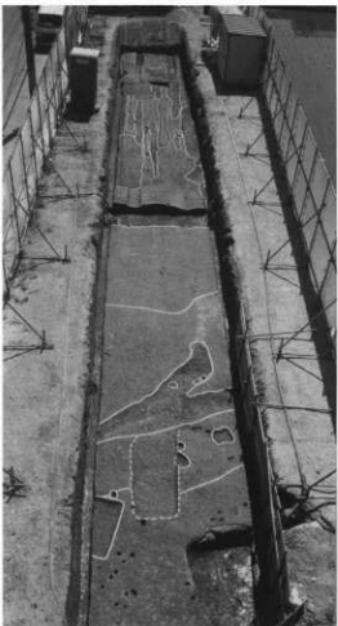
中世水田耕作面(微高地)

東側調査区



自然流路(古墳時代前期～古墳時代中期)  
長方形土壙-2 長方形土壙-3

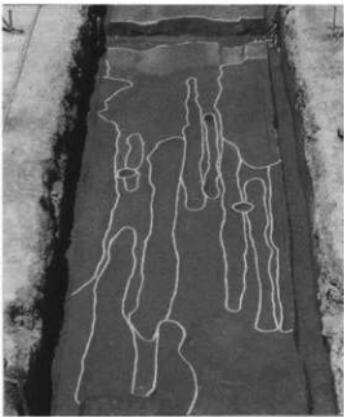
第10図 溝堀遺跡(その3) 遺構平面図 (scale 1/100)



西側調査区遺構検出状況（西から）



東側調査区遺構検出状況（西から）

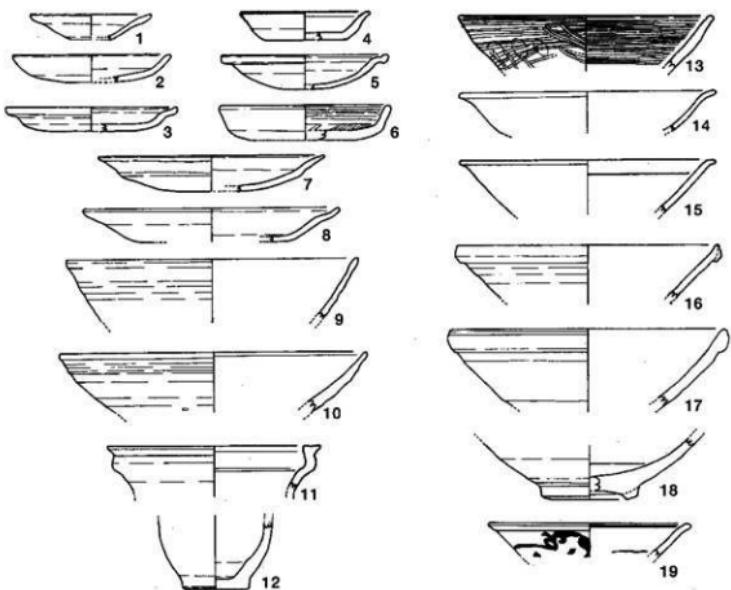


中世水田跡検出状況（東から）

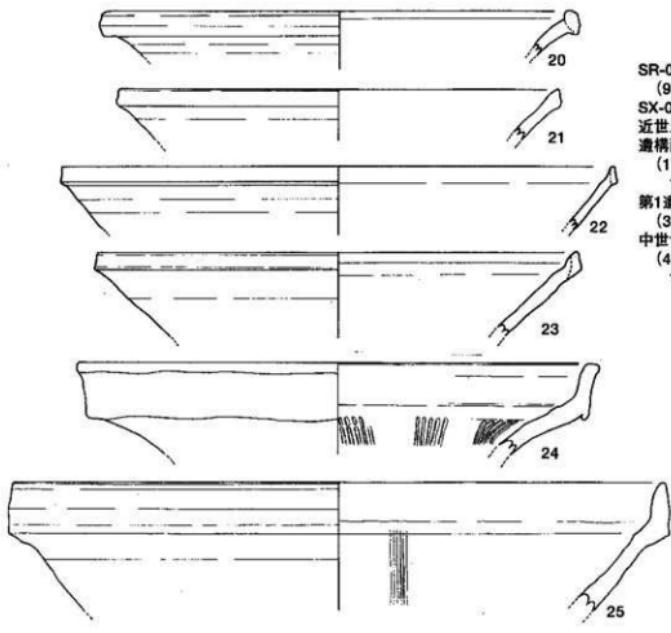


東側調査区長方形土坑-2・3  
検出状況（西から）

第11図 溝呑遺跡（その3）各遺構検出状況

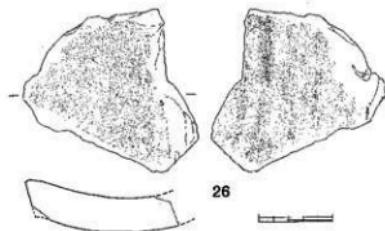


SR-01  
 (9・13・20・21)  
 SX-03  
 (15)  
 近世土取抗 (2・24)  
 造構面直上包含層  
 (1・7・10・11・14・16・  
 17・22・23)  
 第1造構面 下層包含層  
 (3・5)  
 中世包含層  
 (4・6・8・12・14・18・  
 19・25)



0 20cm

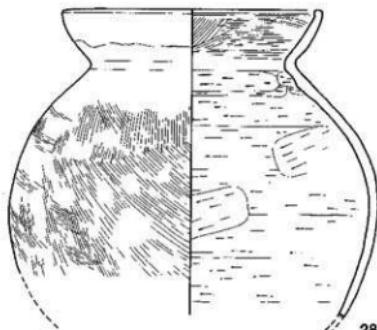
第12図 溝呴遺跡(その3) 出土土器実測図(中世)



第13図 溝昨遺跡(その3)  
中世包含層出土平瓦



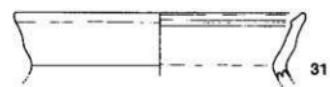
第14図 溝昨遺跡(その3) 出土錢貨



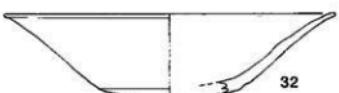
28



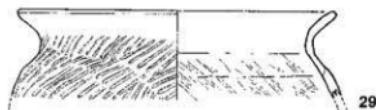
30



31



32



29



33



34



第15図 溝昨遺跡(その3) 自然路出土土器実測図(古墳時代前期初頭～後期)

## 茨木遺跡

所在地	茨木市元町1611-1他
調査原因	マンション建設工事
調査期間	平成13年7月17日～平成13年7月25日
調査面積	40m <sup>2</sup>
調査担当	濱野 俊一
調査結果	



茨木遺跡は市域の中央部、元茨木川左岸の沖積地に立地しており、およそ東西300m、南北700m以上の範囲に広がる。遺跡は弥生時代から中世にわたる集落遺跡であるが、中心になるのは南北町時代の建武年間（1334～1336年）に楠木正成によって築城された伝承を持つ茨木城とその城下町である。茨木城が文献上にはじめて現れるのは応仁二年（1468年）のことである。前年にはじまった応仁・文明の乱に、東軍の安富元綱に属して戦った野田泰忠が、五月二十日、「摂州茨木之城」に陣をかまえている。（『野田泰忠軍状』）そして、茨木氏の名前がその少し前の文安年間（1444～1449年）の『文安年中御番帳』に奉行衆の一人として登場する。このため、遅くとも15世紀初頭前後には茨木城が築城されていたと推定されている。その後、戦国時代になると度々、茨木城が文献上登場する。特に永禄十一年（1568年）に摂津地方に織田信長が侵攻すると、茨木城主の茨木佐渡守は信長側に属すが白井河原の合戦の後は茨木氏に変わって中川清秀の居城となった。その後、豊臣秀吉の直轄地となり、関ヶ原の合戦の翌年の慶長六年（1601年）には片桐且元・貞隆が茨木城に入部している。しかしながら、元和元年（1568年）の大阪夏の陣による豊臣氏滅亡後の元和元年閏六月十三日の「一国一城令」によって茨木城は廃城となってしまう。

茨木城は摂津地域では高槻城・池田城・有岡城（伊丹城）に並ぶ著名な城であるが、廃城後は田畠に開墾されその後は東本願寺茨木別院を中心とした町屋に変化したため、字名と街路の屈曲などによっておおよその規模が推定しうるにすぎなかった。

平成8年度の大手町の発掘調査で茨木城の縦構えの一部と推定される壠が検出され、当該期の軒丸瓦や陶磁器が出土したことによって初めて茨木城の一端が考古学的に検出することができた。

以後、大手町を中心に小規模な立会調査や試掘調査が実施されてきたが、大半の調査地点は近現代の搅乱が著しく、平成12年度の発掘調査においても土器などの遺物は確認されるが、明確な茨木城関連の遺構は検出しにくかった。  
（註1）

今回の調査地点は茨木遺跡の中央部に位置しており、明治初年の茨木城付近の小字名では「城之町」にあたる。当該地は、調査以前は府民信用組合の鉄筋コンクリートの建物があった。このため試掘調査は既存の建物部分を外して試掘坑を設定した。試掘調査の結果、既存の建物部分以外には良好な包含層（整地層）と遺構が残存していることが判明した。このため、本調査は新たに建物建築部分のうち遺物包含層と遺構が残存する部分のみに調査区を設定した。

基本層序としては現代盛土層・近世遺物包含層（整地層）から近世を主体とする平均3層以上

の遺物包含層（整地層）が堆積している、遺構は各層から切り込んでおり、戦前から中世までの複数の時代の遺構が確認された。また、調査区は小さく二工区に別れ、西側の調査区は搅乱のため最終面しか残存していなかったが、東側の調査区は二時期にわたる遺構面を確認した。

以下、検出遺構については西側調査区最終面及び東側調査区上層面と下層面（最終面）について記述する。西側調査区では大半が既存の建物によって搅乱して遺構は消滅していたが、下水道として使用された瓦製土管列（4個）及び大型落ち込みそして土杭が検出されている。瓦製土管は土管として専用に焼成されたものである。上管は規格品のため法量がほぼ一定しており、長さ26cm、凸部直径9cm、凹部直径12cm前後を測る。大型落ち込みは便槽または水溜めと考えられ、長軸約2m80cm、深約90cmを測り、一部、方形に区画された土溜めの木杭と縦板が確認された。

埋土中からは伊万里焼等の近世陶磁器及び瓦が出土している。東側調査区上層面では、溝・土塙・井戸等が検出されている。溝・土塙からは伊万里焼等くらわんか碗や近世棧瓦などが出土している。また、井戸からは伊万里焼等の近世陶磁器に混じって商品銘柄「消毒全乳合入」そして製造者銘「高等全乳春日牧場」のキャップ部分がネジ式の牛乳瓶や「東京山崎帝國堂」銘ガラス瓶やサザエなどの貝類の食物残滓が出土しており、戦前までに建てられていた建物に付属する井戸と推定される。出土している遺物から上層面は江戸時代の後期から戦前までの遺構を検出している。東側調査区下層面（最終面）では上水道として使用された竹管と木製継手（ジョイント）で構成された竹橋と土塙が検出されている。竹橋は幅60cm～80cm、深さ45cm前後の溝の中に竹管を木製継手で接続しており、竹管本体と木製継手の接合部分には漏水防止のために白色粘土で丁寧に目張りをしていた。

出土遺物はおもに整地層と考えられる遺物包含層からで15世紀まで遡る瀬戸美濃製の天目茶碗や備前焼の摺鉢そして16世紀の丹波焼の甕・17世紀の瀬戸美濃の天目茶碗など茨木城存続時期と考えられる土器が出土している。また、瓦類の出土量は多く、平瓦を中心にして中世から近世にかけての軒丸瓦・軒平瓦が出土している。その後の近世町屋になってからの日常雑器の出土量も多く、伊万里焼きなどの国産陶磁器類を筆頭に各地の陶器などが出土している。また、茨木城築城以前の遺物も後世の遺物包含層から混在して出土しており、弥生土器・古墳時代の土師器・須恵器、瓦器碗、上師皿、東播系須恵器の捏鉢、青磁、白磁等が出土している。

### まとめ

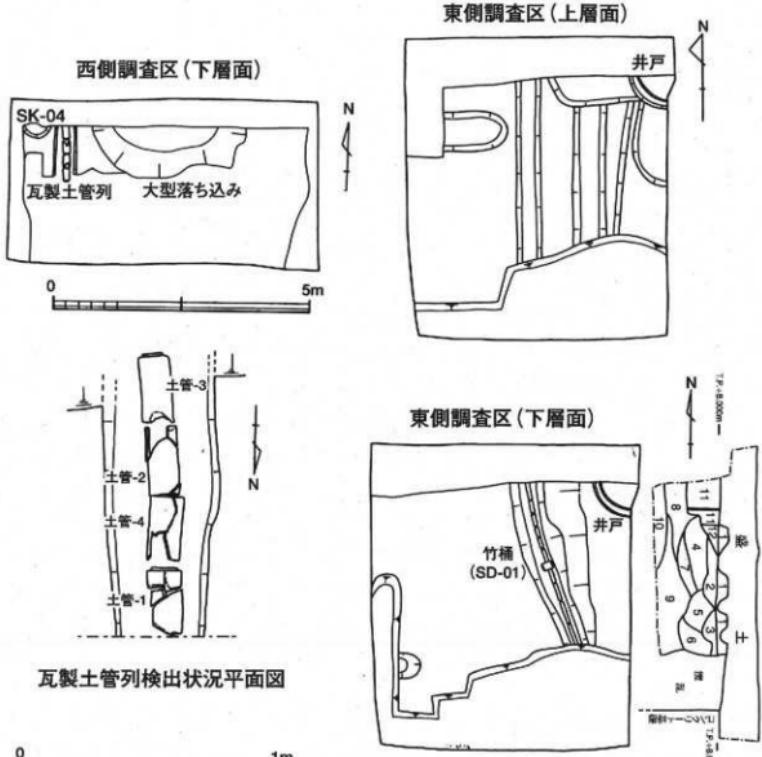
今回の調査では、敷地の大半が既存建物によって搅乱・消滅していたが、部分的にはあるが下水道として使用された瓦製土管列や上水道として使用された竹橋を確認できた。また、瀬戸美濃製の天目茶碗や中世末から近世前半の軒丸瓦・軒平瓦が多数出土したことと、当該地の小字名では「城之町」にあたることから、調査地は茨木城の総構えの中の侍屋敷の屋敷地を一部に想定でき茨木城の縄張りを考えるのに重要な資料を提示することとなった。

（註1）茨木市教育委員会『平成12年度発掘調査概報』中東 正之「茨木跡」

### 参考文献

茨木市役所『茨木市史』昭和44年6月20日

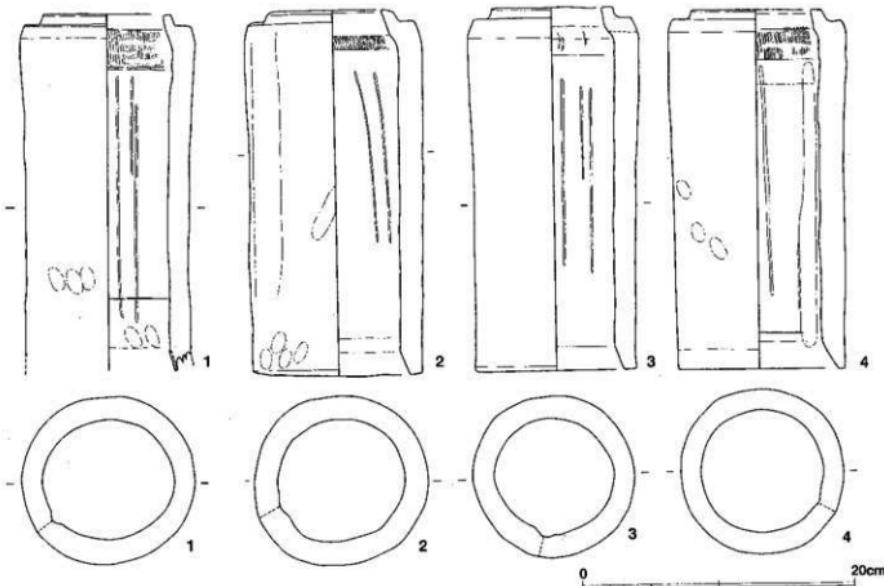
茨木市教育委員会『わがまち茨木一城郭編一』昭和62年3月31日



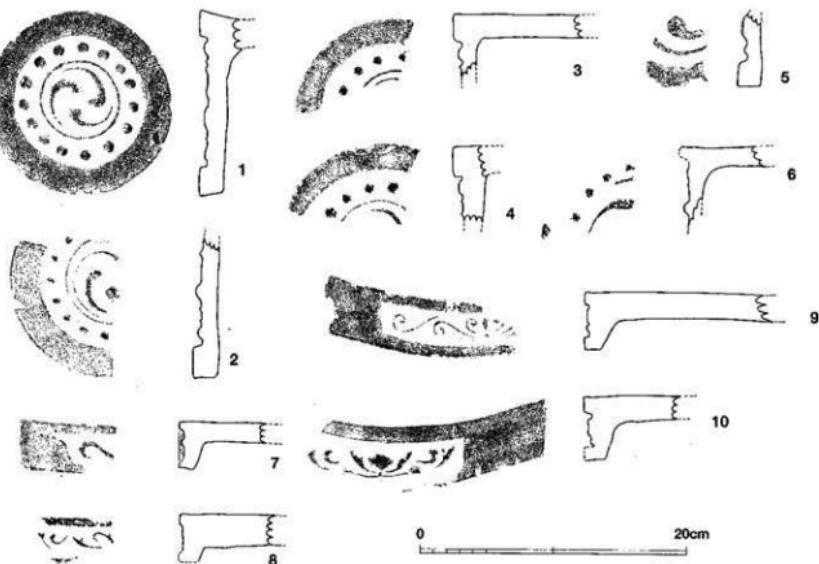
第16図 茨木遺跡 遺構平面図・瓦製土管列検出状況平面図



第17図 茨木遺跡 西側調査区(下層面) 遺構検出状況(東から)



第18図 萩木遺跡 出土瓦製土管実測図



SK-04 (1) 井戸 (10) SD-01 (5) 整地層 (2) 第2構造上に包含層 (7) 中近世包含層 (3・4・6・8・9)

第19図 萩木遺跡 出土瓦実測図



東側調査区(下層面)遺構検出状況(西から)



東側調査区竹檣検出状況(南から)

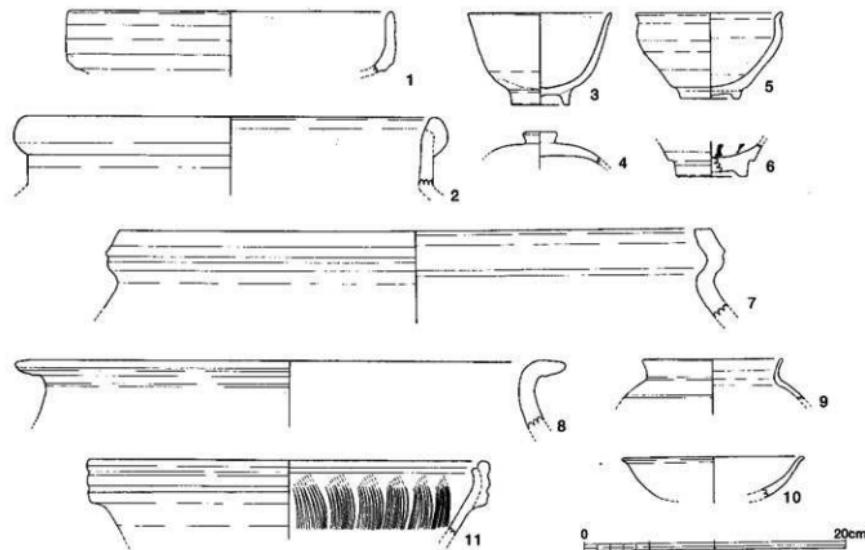


西側調査区(下層面)瓦製土管列検出状況(南から)



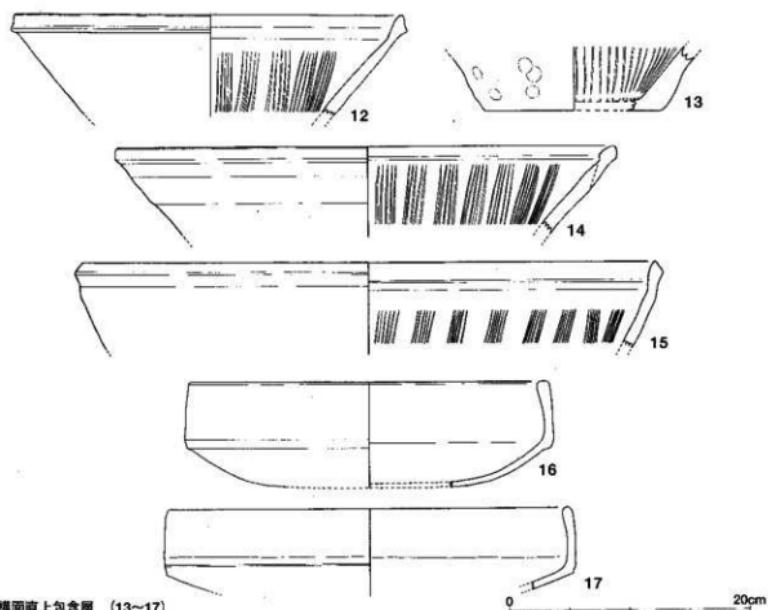
西側調査区(下層面)瓦製土管列検出状況(西から)

第20図 茨木遺跡 各調査区遺構検出状況



第2造構面直上包含層 (1~12)

第21図 茨木遺跡 出土土器実測図(1)



第2造構面直上包含層 (13~17)

第22図 茨木遺跡 出土土器実測図(2)

## 東奈良遺跡

所在地 茨木市奈良町517-1

調査原因 共同住宅建設

調査期間 平成13年8月3日～平成13年8月13日

調査面積 110m<sup>2</sup>

調査担当 宮脇 薫

### 調査結果

東奈良遺跡は市域の南西部の千里丘陵の東に位置している、弥生時代から中世の複合遺跡である。

今回の調査地は遺跡の西端に位置している。

基本層序は、耕土、床土、茶褐色土（遺物包含層）には、須恵器、弥生土器が含まれている。その下層が黄色粘土であり遺構面となっている。

今回の調査によって検出された遺構は、直径が約25～35cmの円形の柱跡であったが、調査範囲の制約の関係もあり建物として捉えることができなかった。

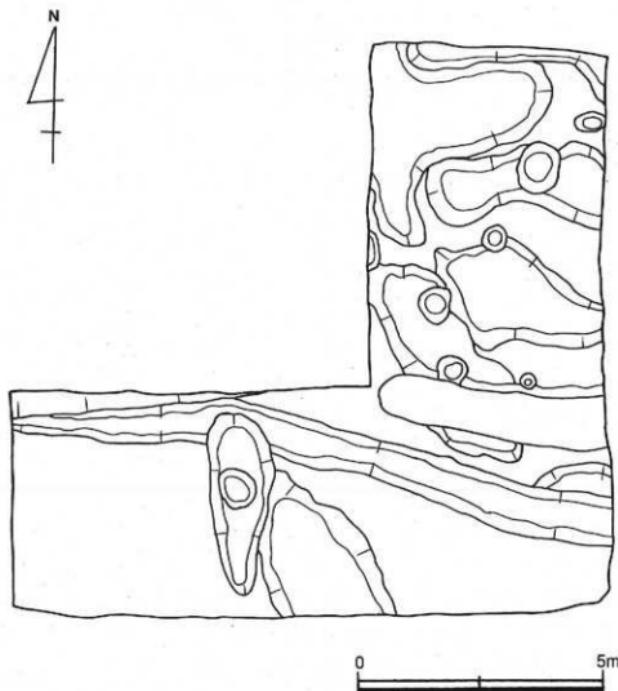
調査区の中央部で、幅が約45～55cm、深さ約30～40cmの溝が西から東に横断する状態で検出された。溝内より、弥生時代中期の土器が出土している。

調査区の西で一辺が約2.7mの変形した方形の落ち込みが検出された。落ち込みの底近くから5世紀後半の須恵器の甕の口縁部及び胴部の破片が出土した。

### まとめ

今回の調査地区においては、茶褐色土（遺物包含層）は約5～10cmと薄く、検出された遺構も希薄なことから東奈良遺跡の範囲としては、集落の西端域を表していると考えることができる。





第23図 東奈良遺跡 遺構平面図



第24図 東奈良遺跡 遺構面検出状況

## 牟礼遺跡

所在地 茨木市中村町493-1他

調査原因 庁舎建設

調査期間 平成13年8月6日～平成13年12月15日

調査面積 1,428m<sup>2</sup>

調査担当 宮脇 薫

### 調査結果

牟礼遺跡は、市域の東の安威川の右岸に位置している。昭和60年の調査（第1次調査）において縄文時代晩期の水路及びそれに伴う井堰がみつかり、この地域においても縄文時代晩期において稻作が行われていたのではないかと注目された。

今回の調査区の西の安威川の同じく右岸には延喜式内社の牟礼神社が鎮座している。

調査は、敷地の関係もあり、2期に分けて実施した。基本層序は、約1.2mの盛土、約25～35cmの耕土、淡青黄色土が約15～20cm、黃灰色粘土が約45～55cmが堆積しており土師器・須恵器及び瓦器の細片が含まれている。その下層は暗灰色砂が約10～20cm堆積しており、その下層の灰色土が遺構面となっている。遺構面は東南方向に緩やかに落ち込んでいる。

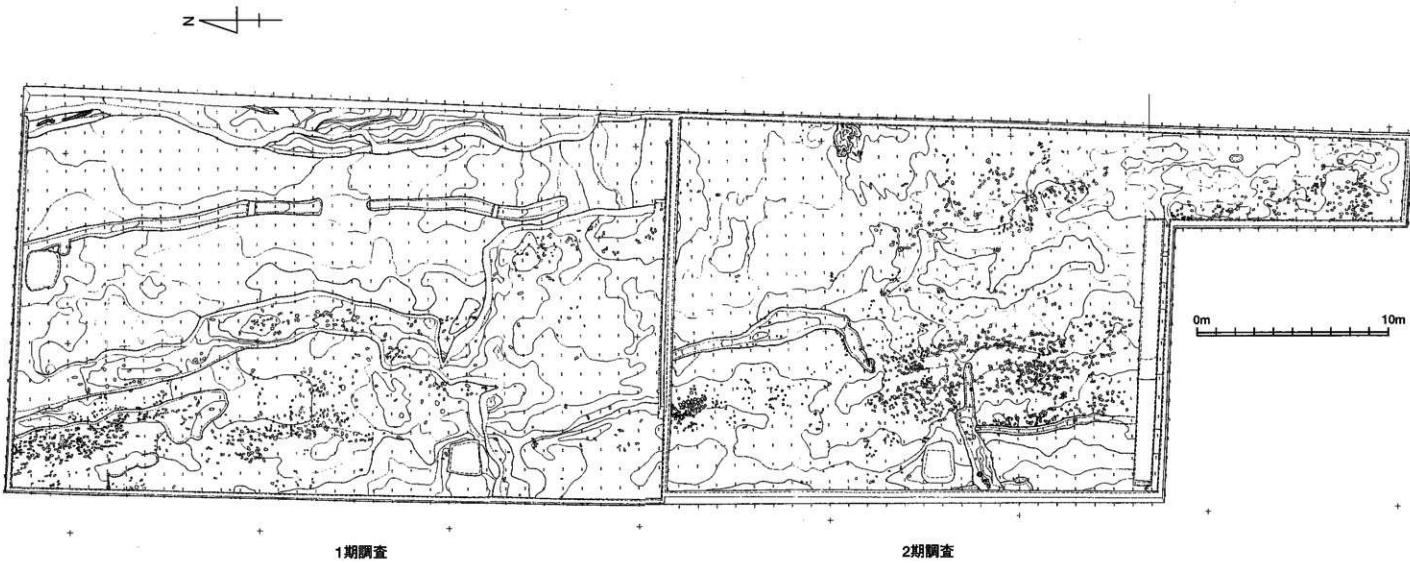
調査区の東端を沿うように、中央部で調査区に流れる自然流路が検出され、幅が1m×5m以上、深さ0.7m以上、水路内は淡黄色砂砾が堆積しており、弥生土器・土師器及び中世に属する遺物が出土した。中央部を南北に蛇行しながら、調査区の中央で途切れた状態で幅が約40～50cmの深さ約7～16cmの溝が検出された。調査区の西半で中央で途切れる、幅が約2mの比高が約7～10cmの畦状の遺構が検出された。中央部で約15～25cmの段がついて南東へ緩やかに遺構面が下がっていく。その他、途切れた状態の溝が3条検出された。また、調査地の北西から南に密集した状態で足跡が検出された。

### まとめ

今回の調査では、集落内の住居域を示す遺構は確認されなかった。一部ではあるが、畦状及び溝が検出されていることから調査地を含む一帯が水田城を考えることができる。

今回の調査で検出された自然水路の規模及び流路を含む付近の様子について、今後の付近の調査によって明らかにしていかなければならない。

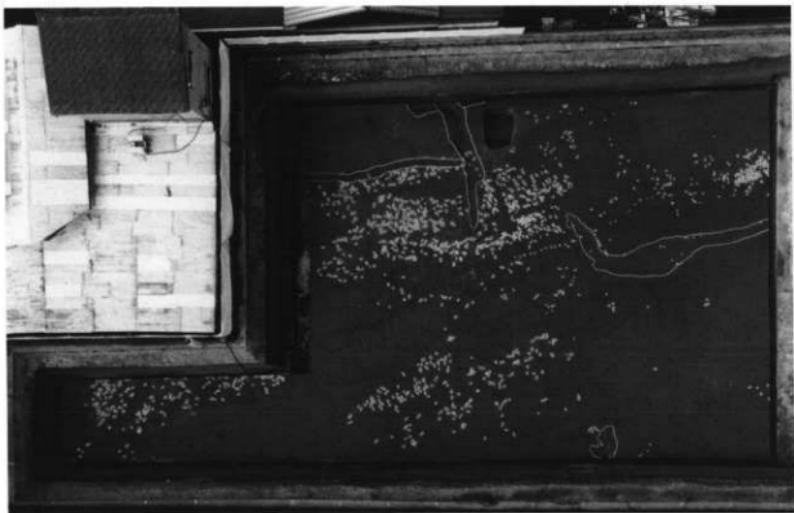




第25図 牽礼遺跡 遺構平面図



第26図 牟礼遺跡 第1期調査遺構検出状況（西から）



第27図 牟礼遺跡 第2期調査遺構検出状況（東から）

## 牟礼遺跡

所在地 茨木市中津町872-2他

調査原因 共同住宅建設事業

調査期間 平成13年8月1日～平成13年11月20日

調査面積 1,483m<sup>2</sup>

調査担当 若林 純也

### 調査結果

牟礼遺跡は茨木市のほぼ中央部、安威川の右岸に広がる縄文時代晩期から中世の複合遺跡である。遺跡の発見は、昭和60年の大型店舗建設に伴う調査（第1次調査）で発見され、その調査では、自然流路、井堰、水田などが検出され、自然流路の埋土からは縄文時代晩期の土器が出土している。



今回の調査地は、遺跡のほぼ中央、昭和60年の調査地の北東に隣接し、共同住宅建設に伴い、その住宅本体部分、及び、立体駐車場部分を対象として行った。店舗部分を第1遺構面、駐車場部分を第2調査区とした。また、上層と下層に2面の遺構面を確認し、上層を第1遺構面、下層を第2遺構面とした。

第1遺構面は、現地表面下より1.8mのところで検出した。検出遺構は、第2調査区では、明確な遺構は全く検出されなかったが、第1調査区で小柱穴数個、土塁、溝、落ち込みを検出した。出土遺物はこれらの遺構のうち、溝2条（SD-01・SD-02）に集中し、それ以外の遺構からは若干の須恵器、土師器が出土するにとどまった。

SD-01は調査区の北東から南西に向かう溝で、幅約1.5m、深さ約25cmを測り、この溝からは、古式土師器・須恵器が出土している。

SD-02は幅約2m、深さ40～80cmを測り、SD-01と同一の北東部から流れ、途中、急激に南東方向に変えて流れる溝である。この流れが南東に向かう部分は、溝幅が広がり、SD-02はSD-01と異なって古墳時代後期の須恵器・土師器は出土せず、古墳時代前期初頭（庄内併行期）の土器のみ出土している。そして同時期の所産と考えられる木製農具（平鋤、なすび形又鋤）が多数検出され、摺状の木製品なども出土している。

これらのことから二つの溝の関係は、古墳時代初頭、北東から南東に向けてのU字型だった溝（SD-02）を、古墳時代後期に北東から南東へのまっすぐな溝（SD-01）に再掘削したものと思われる。

第2遺構面は第1遺構面より50cm下層で検出した。検出遺構は、第1調査区では小穴、溝、落ち込み等を検出することができた。これらの遺構からは少量の弥生時代前期の土器片が出土している。その中で、調査区の北東隅で検出された遺構（遺構の形状は調査区外に延びるため不明）

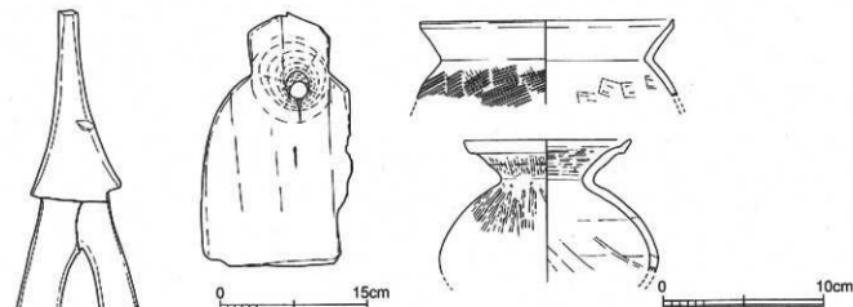
からは、生駒西麓産胎土の縄文時代晚期の船橋式～長原式と考えられる土器群がまとまって出土した。

第2調査区では、調査区の南西隅に第1調査区と同じ高さで溝を検出し、それ以外の場所では、南西隅から調査区全体に、一段落ち込んだ状態で遺構を検出した。その検出遺構は、さらに北側への落ち込み、溝、小型柱穴である。

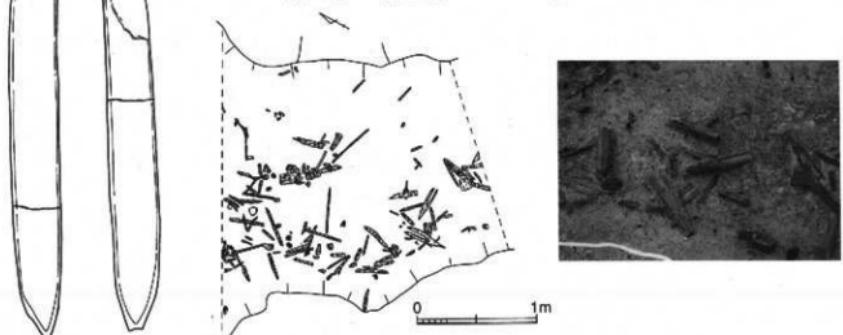
出土遺物は一段目の落ち込みの埋土内から、弥生時代前期の土器と縄文時代晚期の土器が共伴して出土し、結晶片岩製石棒、木葉文の入った彩文土器片も一緒に出土している。また、北側へと続く落ち込み、調査区の中央で検出した溝の埋土からも、弥生時代前期と縄文時代晚期の土器が一緒に出土している。

#### まとめ

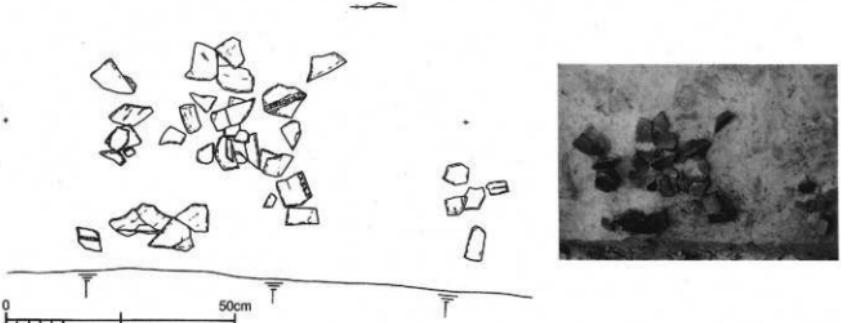
これまで牟礼遺跡は、早くから市街化が進み、また縄文時代晚期の遺構面まで深度がかなり深いため、当該時期の発掘調査が少なく、昭和60年第1次の調査以降、縄文時代晚期の遺物は確認されていなかった。今回の調査で明確な住居跡等の生活痕跡は検出できなかったが、集落の一端である縄文時代晚期の土器群等が出土したことによって、新たなる知見が得られた。



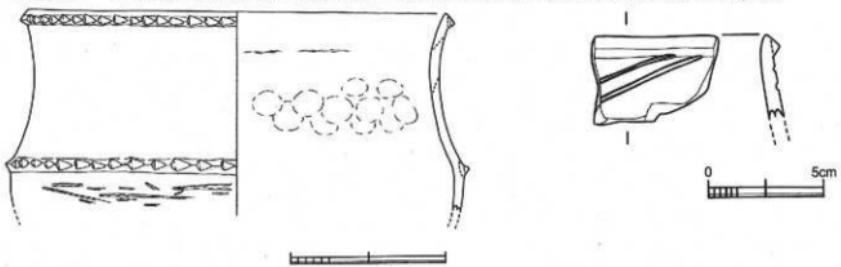
第28図 牟礼遺跡 SD-02 木製品・出土土器実測図



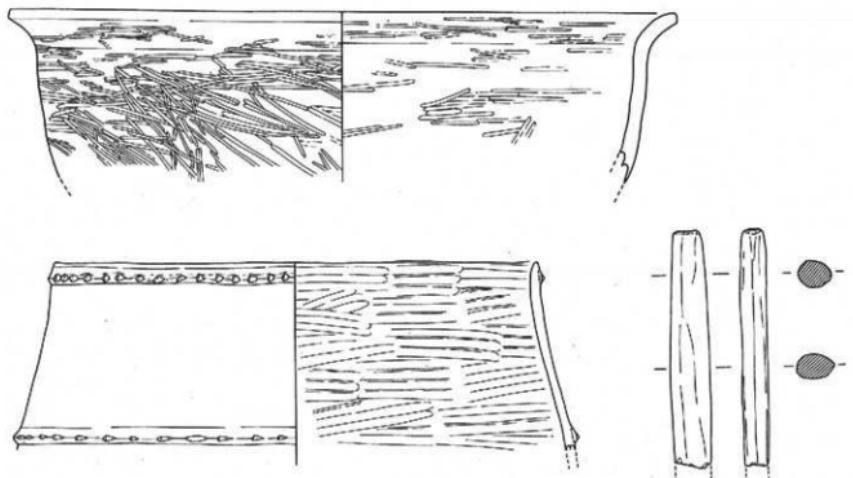
第29図 牟礼遺跡 SD-02 木製品集中部出土状況図



第30図 牟礼遺跡 第1調査区第2遺構面 北東部落ち込み縄文時代晚期土器出土状況

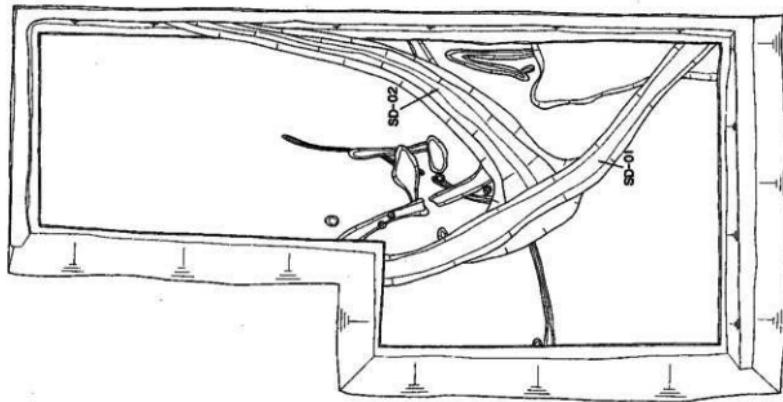


第31図 牟礼遺跡 第1調査区第2遺構面 北東部落ち込み縄文時代晚期土器実測図



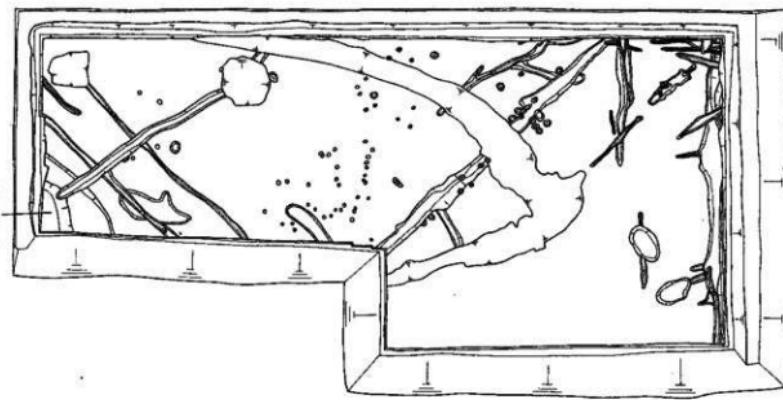
第32図 牟礼遺跡 第2調査区出土土器・石棒実測図

第1調査区 第1遺構面



第33図 牽礼遺跡 各遺構平面図

第1調査区 第2遺構面



第2調査区

下部落ち込み

上部落ち込み



# 東奈良遺跡

所在地 茨木市沢良宜西一丁目358-1他

調査原因 共同住宅建設

調査期間 平成13年11月19日～平成13年12月4日

調査面積 472m<sup>2</sup>

調査担当 宮脇 薫

## 調査結果

今回の調査地域は、東奈良遺跡の南端部に位置している。

基本層序は、盛土、耕土、床土、淡青黄色土、青灰色粘土、暗青灰色砂質土、灰色粘土になっている。灰色粘土が遺構面となっている。暗青灰色砂質土からは植物遺体と共に弥生時代中期から古墳時代の土器の細片が出土した。さらに下層の灰色土が遺構面である。



調査地区の東では、緩やかに東南方向に遺構面が下がり、東南の端部では沼状になっている。

今回の調査によって検出された遺構は、溝、土塙である。

溝—I、II、III、IV、Vは調査地区的北東から西南に横断し、調査地区的北から南に縦断する溝—VI、VIIによって切られた状態で検出された。溝—VIIは調査地区的東半部を北から東に横断する状態で検出された。溝—I内よりほぼ完形の五世紀後半の須恵器の杯身が出土した。その他溝からは弥生後期～古墳時代前期の土器が出土した。溝—VIIは東南の端部の沼状遺構に注いでいる状態で検出された。

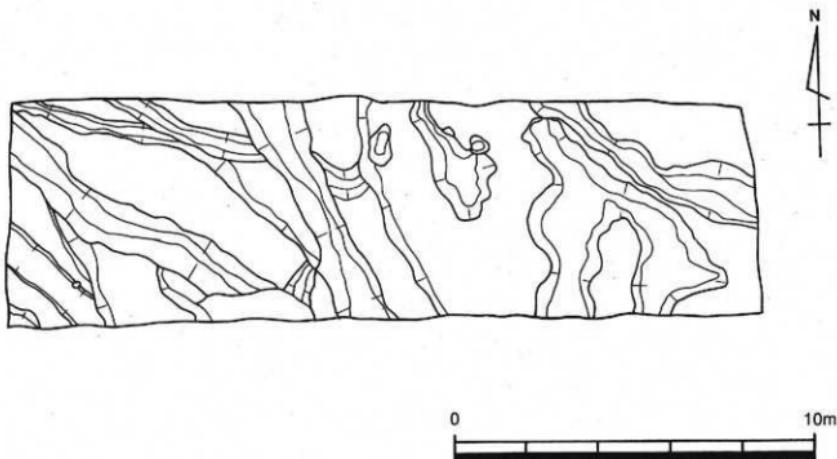
土塙は、調査地区的中央部の北で検出された。長径1.2m、短径0.7mの不整形な楕円形で底面は舟底状になっており、深さは約45cmである。

遺構面及び溝において、人間等の足跡が見つかっている。

## まとめ

今回の調査地点は東奈良遺跡の南西端と考えられていた地域であり、調査においても溝が複雑に多く検出された結果、弥生時代～古墳時代前期の集落端を示している。

遺構面の上層に暗青灰色砂質土が約25～35cm堆積しており、付近の河川などの洪水時の堆積であり、古墳時代前期以後に調査地付近が洪水に見舞われた考えができる。



第34図 東奈良遺跡 遺構平面図



第35図 東奈良遺跡 遺構検出状況（西から）



**平成13年度発掘調査概報**

発行日 平成14年3月31日  
発行 茨木市教育委員会  
印刷所 日栄印刷紙工株式会社